

ダイジェスト版

子どもの生活と 学びに関する親子調査 2025



「子どもの生活と学び」研究プロジェクトについて	p.2
調査概要	p.3
基本属性2025	p.4

I 子どもの生活と学びの変化

- ① メディア利用時間
- ② デジタルメディアの利用
- ③ 学習でのデジタル機器の利用
- ④ 学習時間
- ⑤ 勉強する場所
- ⑥ 学習方法
- ⑦ 学習意欲・学習動機

II 学校生活の変化

- ① 学校での生活
- ② 先生のかかわり

- ③ 勉強や教科の好き嫌い・文理意識
- ④ 学校の授業
- ⑤ 学校でのデジタル機器の利用頻度、家への持ち帰り頻度
- ⑥ 学校でのデジタル機器の利用内容
- ⑦ デジタル機器を使うことの効果や影響に対する意識

III 家庭の変化

- ① 子どもの勉強に対する保護者のかかわり
- ② 1年間の経験
- ③ 教育費
- ④ 今後の社会に関する意識
- ⑤ 親子の進学意識

調査企画・分析メンバー

「子どもの生活と学び」研究プロジェクトについて

東京大学社会科学研究所とベネッセ教育総合研究所は、2014年1月に、「子どもの生活と学び」の実態を明らかにする共同研究プロジェクトを立ち上げました。

本ダイジェスト版では、この研究プロジェクトの一環として行った2015年から2025年までの調査結果を載せています。

研究プロジェクトの特徴

1 小学1年生から高校3年生の「現在」と「時代変化」とらえることができる

本研究プロジェクトでは、小学1年生から高校3年生の子どもの保護者に対して、毎年継続して調査を実施しています。これにより、12学年にわたる子どもの生活や学び、保護者の子育ての実態などの「現在」の様子（1時点の学年による違い）を明らかにできます（図中①）。また、経年比較により、子どもと保護者の「複数時点の時代変化」をみることができます（図中②）。

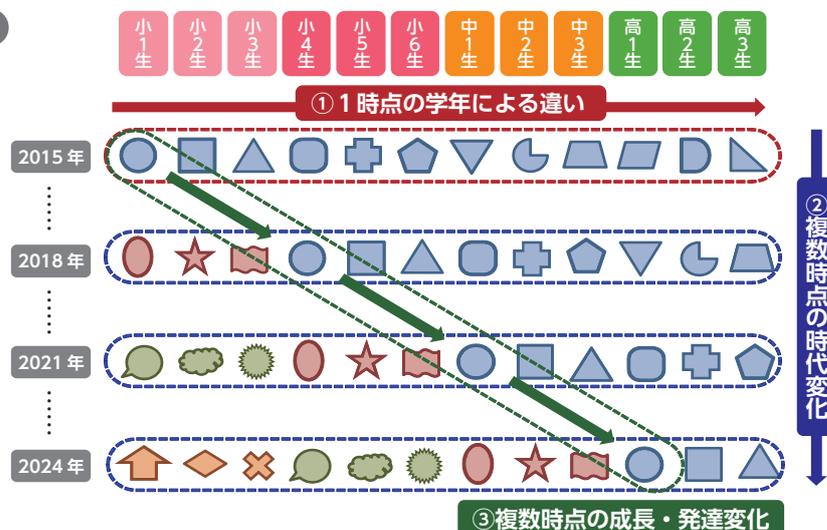
2 親子の「成長・発達」のプロセスをとらえることができる（親子パネルデータ分析）

また、本研究プロジェクトでは、同じ子どもとその保護者を継続して調査しています。これにより、子どもが毎年どのように成長・発達していくのか、また、それによって保護者のかかわりや意識はどのように変化するかといった、同じ親子の「複数時点の成長・発達変化」の様子や因果関係を明らかにすることができます（図中③）。

3 子どもの生活と学びにかかわる意識や実態を、幅広く詳細にとらえることができる

子どもを対象にした調査では、生活、学習、人間関係、価値観、自立の程度などを幅広くたずねています。また、保護者を対象にした調査では、子どもへのかかわりや子育て・教育の意識などをたずねています。この2つの調査から、子どもと保護者の日々の生活や学習の様子を浮かび上がらせるとともに、子どもと保護者の課題に迫ります。

調査のイメージ図



※研究プロジェクトの詳細は、最後のページで紹介しているWebサイトよりご覧ください。

◇データ扱い上の注記

・図で使用している百分率(%)は、小数第2位を四捨五入して算出している。四捨五入の結果、数値の和が100.0にならない場合がある。

調査概要

調査テーマ

子どもの生活と学習に関する意識と実態(子ども調査)
 保護者の子育て・教育に関する意識と実態(保護者調査)
 ……同一の親子を対象に2015年から継続して追跡する縦断調査

調査時期

2025年7～9月

調査方法

調査依頼は郵送、回答はWebで実施
 ※調査依頼は、2015年～2025年のすべての回で郵送で実施。調査の回答は、2015年と2021年は郵送とWebの併用、2016年～2020年は郵送、2022年～2025年はWebで実施。

調査対象

全国の小学1年生から高校3年生の子どもとその保護者
 ※小学1～3年生は保護者が回答。

発送数・回収数・回収率は以下の通り

	全体			小1～3生			小4～6生			中学生			高校生		
	発送数	回収数	回収率(%)	発送数	回収数	回収率(%)	発送数	回収数	回収率(%)	発送数	回収数	回収率(%)	発送数	回収数	回収率(%)
2015年	21,569	16,574	76.8	5,504	4,690	85.2	5,080	3,950	77.8	5,379	4,051	75.3	5,606	3,883	69.2
2016年	21,485	15,849	73.8	5,617	4,915	87.5	5,234	3,797	72.5	5,225	3,706	70.9	5,409	3,425	63.3
2017年	19,136	15,307	80.0	5,700	5,167	90.6	4,662	3,643	78.1	4,312	3,311	76.8	4,462	3,186	71.4
2018年	18,217	14,424	79.2	5,408	4,928	91.1	4,634	3,616	78.0	3,977	2,967	74.6	4,198	2,913	69.4
2019年	20,056	15,311	76.3	5,879	5,175	88.0	5,251	4,071	77.5	4,497	3,168	70.4	4,429	2,897	65.4
2020年	20,413	15,656	76.7	5,921	5,127	86.6	5,639	4,407	78.2	4,595	3,323	72.3	4,258	2,799	65.7
2021年	20,471	15,596	76.2	5,829	5,066	86.9	5,704	4,430	77.7	4,812	3,432	71.3	4,126	2,668	64.7
2022年	20,951	13,398	63.9	5,844	4,716	80.7	5,737	3,664	63.9	5,058	2,922	57.8	4,312	2,096	48.6
2023年	21,525	13,201	61.3	5,743	4,583	79.8	5,869	3,489	59.4	5,462	3,070	56.2	4,451	2,059	46.3
2024年	19,866	12,242	61.6	5,866	4,487	76.5	5,279	2,916	55.2	4,853	2,849	58.7	3,868	1,990	51.4
2025年	20,331	11,228	55.2	5,746	4,192	73.0	5,459	2,626	48.1	4,942	2,483	50.2	4,184	1,927	46.1

※本冊子では、各調査年の有効回答を分析対象としている。①親もしくは子どもの片方回答(小4～高3生)、②学年の回答が親と子で不一致、③調査発送時の学年と回答学年が不一致、④「[在学していない]と回答したケースは、有効回答から除外している。

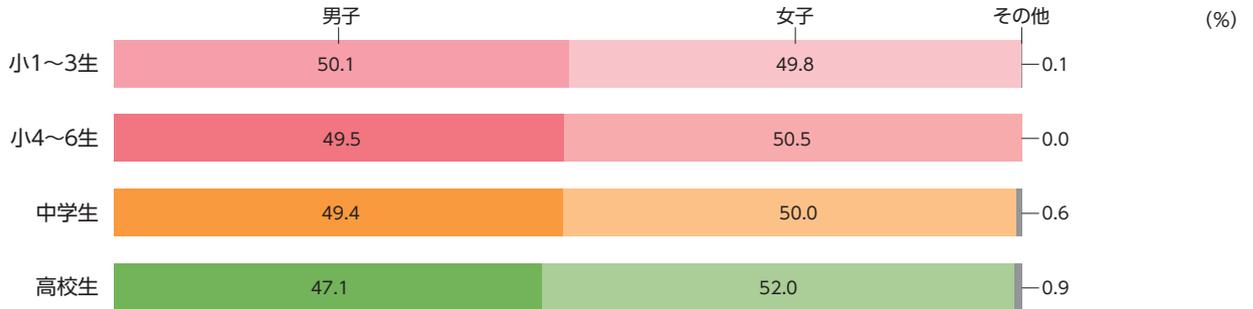
※調査方法の変更に伴い、調査年ごとの違いを同じ条件で比較するため、設問ごとに「無回答・不明」を除いた実回答数を分母として数値の算出を行った。このため、2021年度調査までに発表した数値と異なることがある。

※本冊子の解説文での「小中高校生」は小4～6生、中学生、高校生を指している。「小中学生」に関して、子ども回答の場合は、小4～6生と中学生を指し、保護者回答の場合は、小1～3生、小4～6生、中学生を指す。

基本属性 2025

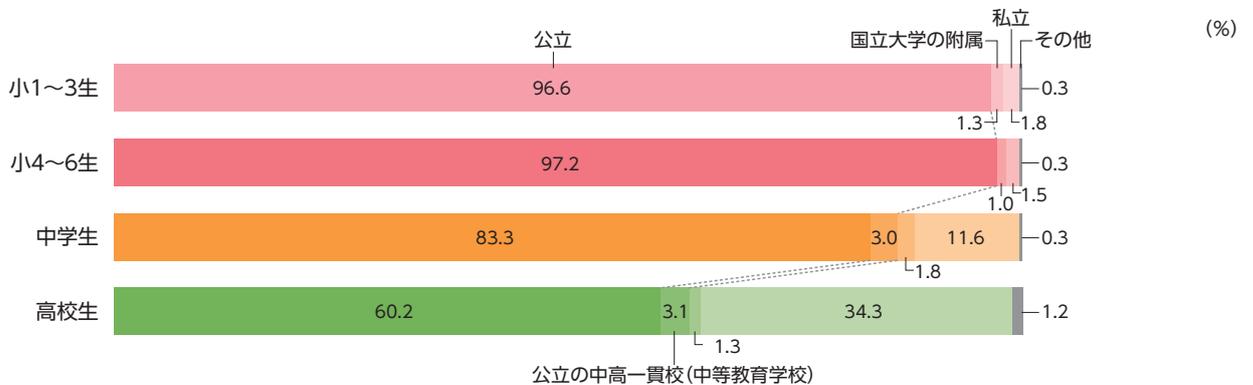
子どもの性別(学校段階別)

小1～3生は保護者回答
小4以上は子ども回答



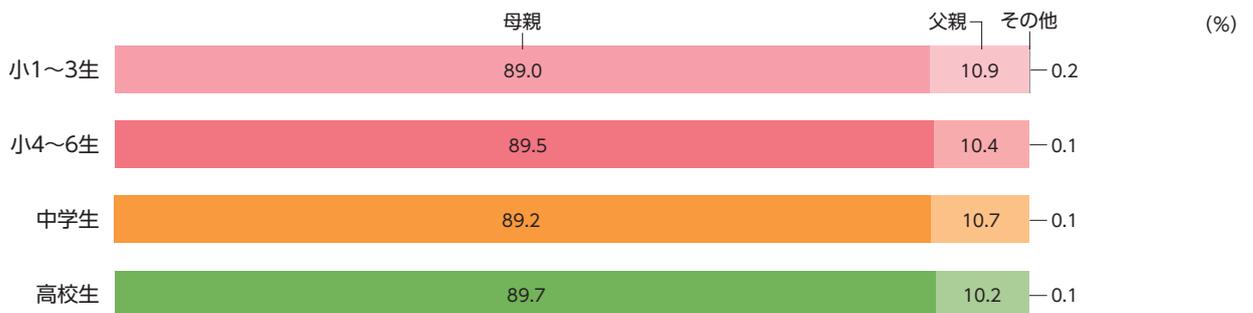
子どもが通っている学校の種類(学校段階別)

保護者回答



保護者と子どもとの続柄(学校段階別)

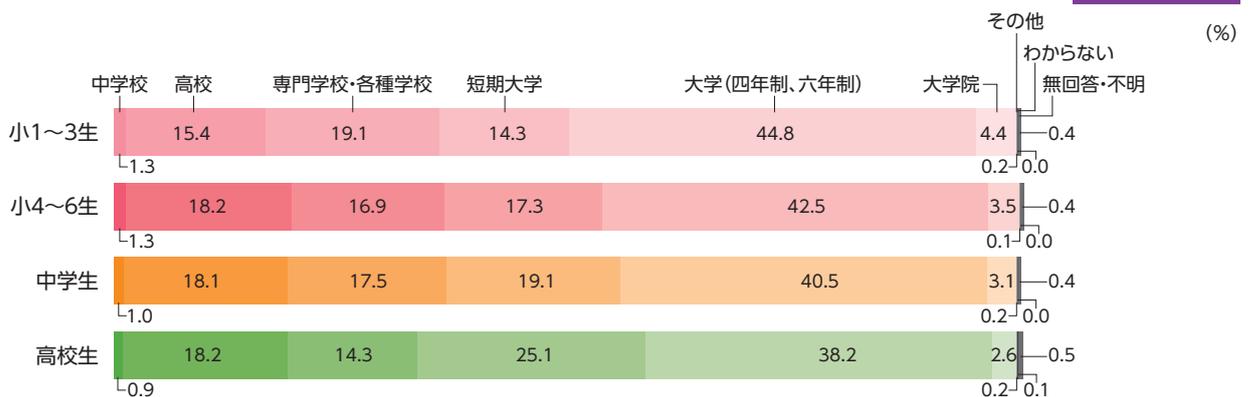
保護者回答



※「その他」は「祖母」「祖父」「その他」の回答の合計。

母親の最終学歴(学校段階別)

保護者回答



I 子どもの生活と学びの変化

① メディア利用時間

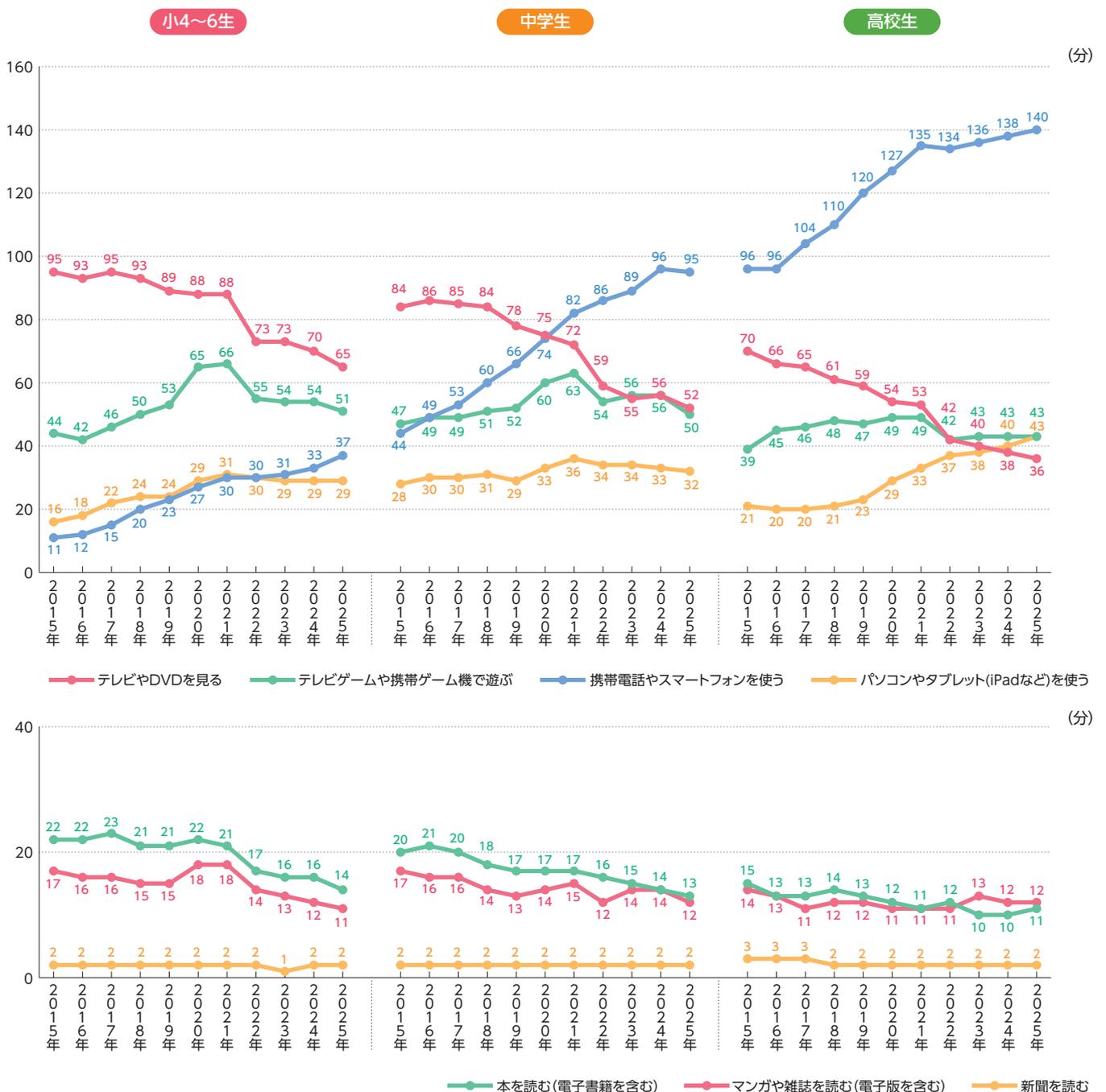
この11年で携帯・スマホの利用時間が増え、テレビと読書は減少

2015年に比べて2025年は、携帯・スマートフォンの利用時間が増えている。小4～6生は11分から37分へ、中学生は44分から95分へ、高校生は96分から140分へと増加した。一方、テレビやDVDの視聴時間は小4～6生で95分から65分へ、中学生で84分から52分へ、高校生で70分から36分へと短くなっている。本やマンガ・雑誌を読む時間もすべての学校段階で減少している。

Q. あなたはふだん(学校がある日)、次のことを、1日にどれくらいの時間やっていますか。
学校の中でやる時間は除いてください。日によって違うときは、平均していただきたいの時間を教えてください。

図1-1-1 メディア利用時間(1日あたり)

子ども回答



注 平均時間は、「しない」を「0分」、「4時間」を「240分」、「4時間以上」を「300分」のように置き換えて、「無回答・不明」を除外した上で算出。

I 子どもの生活と学びの変化

② デジタルメディアの利用

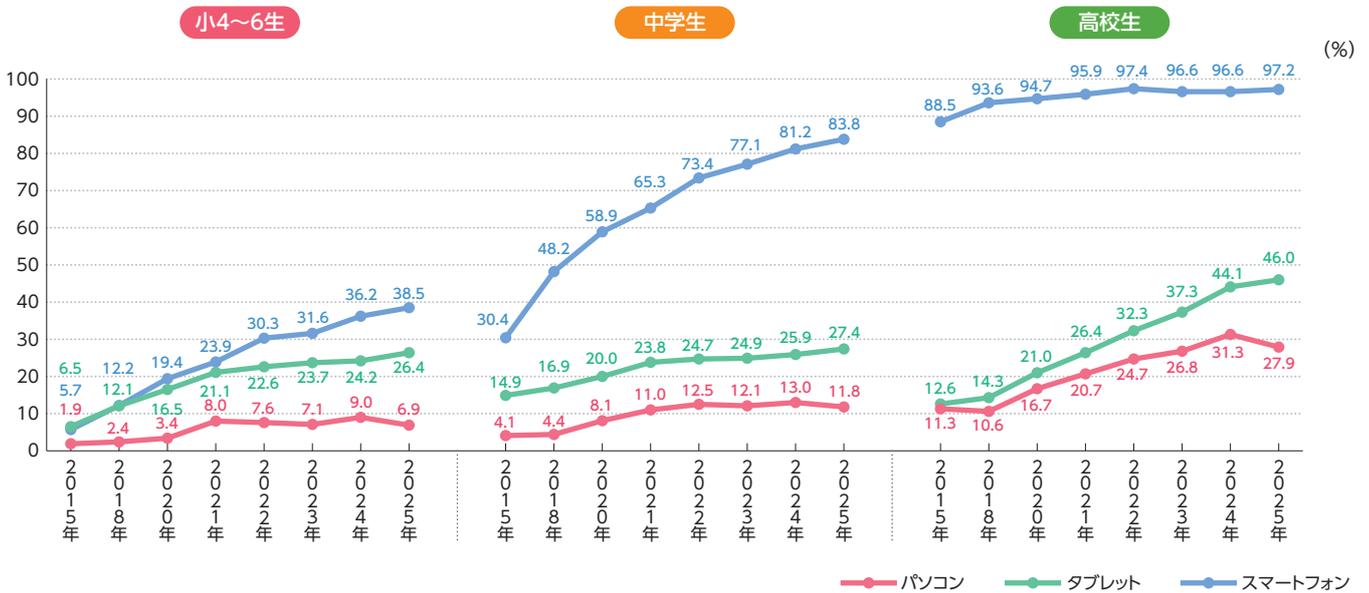
「自分専用」のスマホの所持率が高まり、 動画視聴・SNS利用が常態化している

2015年に比べて2025年は、「自分専用」のスマートフォンを使う割合が増えた。小4～6生は1割未満から4割弱へ、中学生は3割程度から8割強へ増加し、高校生は9割台後半に達する。タブレットの「自分専用」化も進み、2025年には小4～6生で3割弱、高校生では5割弱にのぼる。学習以外の動画視聴やSNS利用については、「ほぼ毎日」が小4～6生で約4割、中学生で5割台、高校生で6割強と高頻度で使用している。一方、学習以外での生成AI利用は、「しない」が小4～6生で8割台、高校生でも約5割程度で、「ほぼ毎日」は高校生でも1割未満にとどまる。

Q. あなたは、次のようなデジタル機器を、家で使っていますか。

図1-2-1 家でのデジタル機器の利用(自分専用)

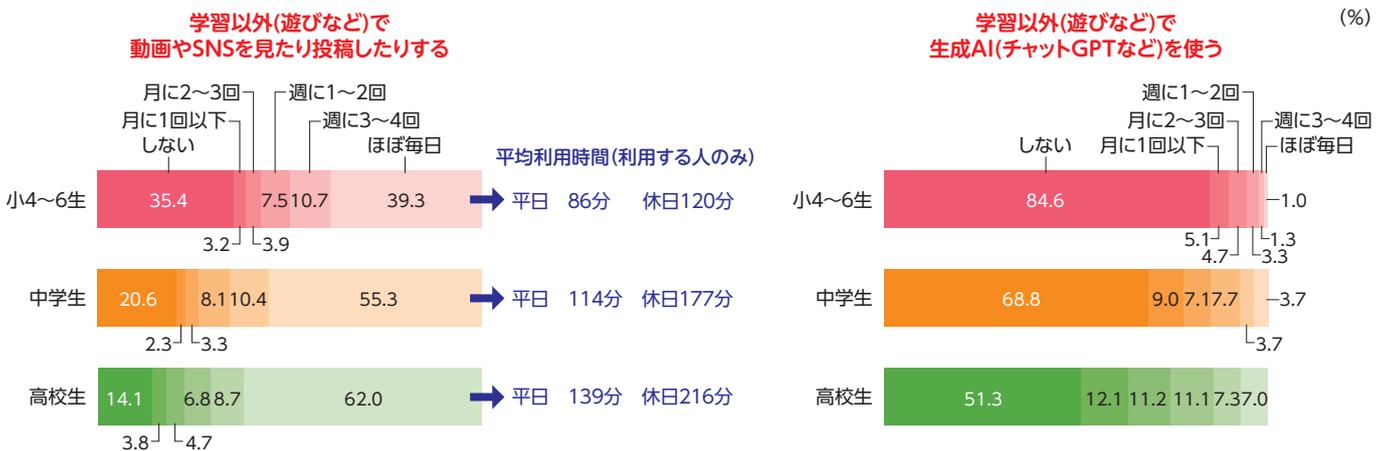
子ども回答



Q. あなたはふだん(学校がある日)、次のことをするために、デジタル機器をどれくらい使っていますか。学校の中でやる時間は除いてください。

図1-2-2 学習以外でのデジタル機器の利用(2025年)

子ども回答



注1 「自分専用のものを使っている」の%。(図1-2-1)

注2 2025年のみにとずねた項目。(図1-2-2)

I 子どもの生活と学びの変化

③ 学習でのデジタル機器の利用

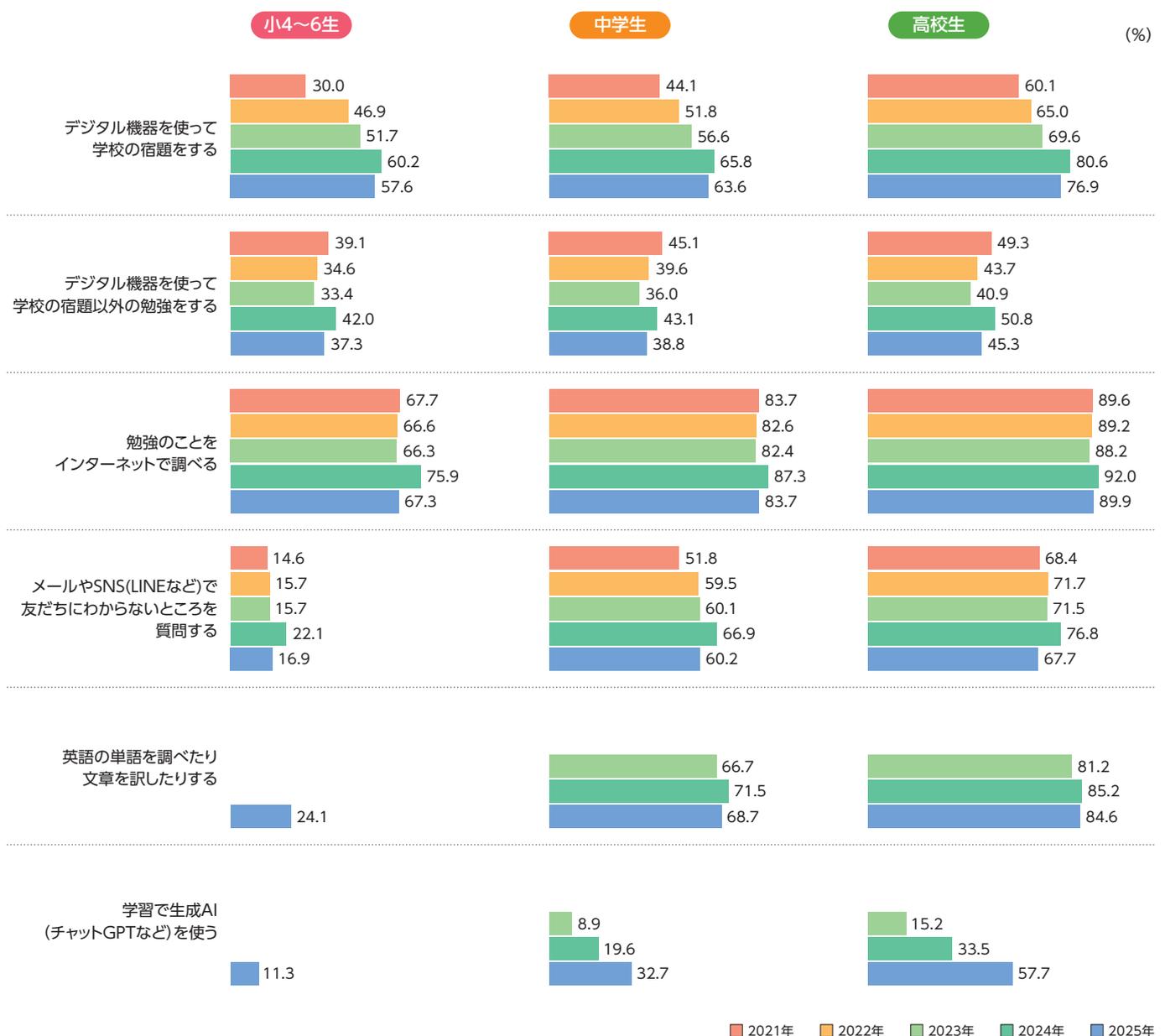
宿題でのデジタル活用が増え、 中高生では生成AI利用も広がりつつある

2021年と比べ、2025年は端末を使って宿題をする割合が増えている。小4～6生は3割から6割弱に、中学生は4割強から6割強に、高校生は6割から8割弱になった。勉強のことをインターネットで調べる割合は、2025年でも一貫して中学生・高校生で8～9割と高い。メールやSNSで友だちに質問する割合は、2025年に中学生で6割、高校生で7割弱である。学習で生成AI(チャットGPTなど)を使う割合は、2025年時点で小4～6生が1割強、中学生が3割強、高校生が6割弱だった。

Q. あなたはふだん(学校がある日)、次のことをするために、デジタル機器をどれくらい使っていますか。学校の中でやる時間は除いてください。

図1-3-1 学習でのデジタル機器の利用

子ども回答



注1 「月に1回以下」+「月に2～3回」+「週に1～2回」+「週に3～4回」+「ほぼ毎日」の合計%。

注2 「英語の単語を調べたり文章を訳したりする」「学習で生成AI(チャットGPTなど)を使う」の2項目は、小4～6生では2025年から、中学生と高校生は2023年からたずねている。

I 子どもの生活と学びの変化

④ 学習時間

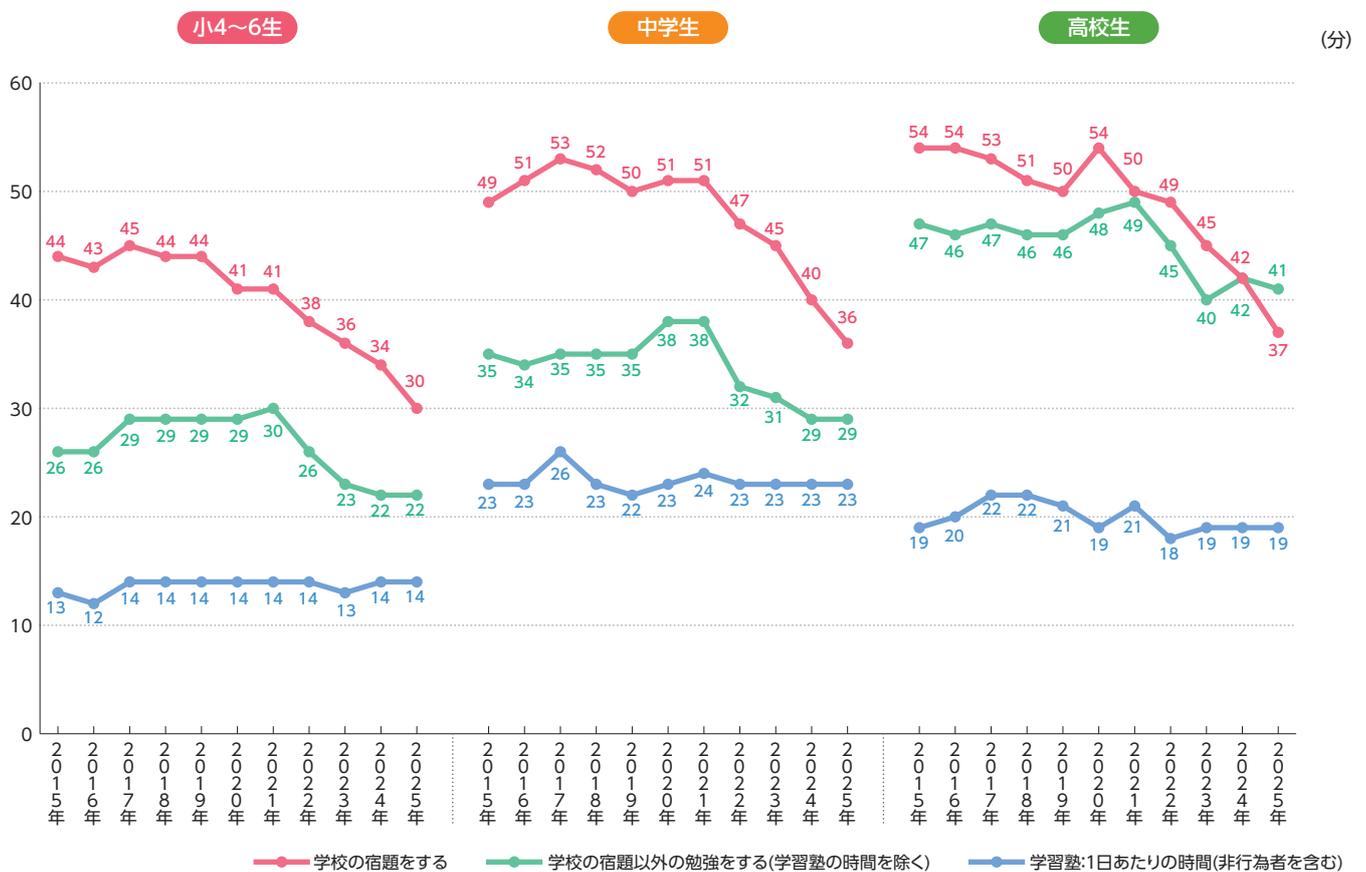
この11年で学習時間が減少。とくに宿題時間の減少が大きい

2015年に比べて2025年は、1日あたりの学習時間は減少している。内訳をみると、とくに「学校の宿題をする」時間が大きく減り、小4～6生は44分から30分に、中学生は49分から36分に、高校生は54分から37分になった。宿題以外の学習時間もやや減少している一方で、学習塾に費やす時間は大きな変化がみられない。結果として、総学習時間は小4～6生が83分から66分に、中学生が107分から88分に、高校生が119分から97分に減少した。

Q. あなたはふだん(学校がある日)、次のことを、1日にどれくらいの時間やっていますか。
 学校の中でやる時間は除いてください。日によって違うときは、平均していただきたいの時間を教えてください。

図1-4-1 学習時間(1日あたり)

子ども回答



学習時間の総計(1日あたり)

(分)

	2015年	2016年	2017年	2018年	2019年	2020年	2021年	2022年	2023年	2024年	2025年
小4～6生	83	81	88	87	86	84	84	78	72	70	66
中学生	107	108	114	110	107	112	113	102	98	93	88
高校生	119	119	123	118	116	121	120	112	105	103	97

注1 「学校の宿題をする時間」「学校の宿題以外の勉強をする時間」の平均時間は、「しない」を「0分」、「4時間」を「240分」、「4時間以上」を「300分」のように置き換えて算出。

注2 「学習塾の時間」の平均時間は、「通っていない」と回答した子どもを0分、「通っている」と回答した子どものうち「1日にどれくらいの時間、勉強していますか」という質問に対して、「30分」を30分、「1時間」を60分、「4時間」を240分、「4時間以上」を270分のように置き換え、週あたりの通塾回数をかけあわせて7で割って算出。

注3 学習時間の総計は「学校の宿題をする時間」+「学校の宿題以外の勉強をする時間(学習塾の時間を除く)」+「学習塾の時間」の平均時間。

I 子どもの生活と学びの変化

⑤ 勉強する場所

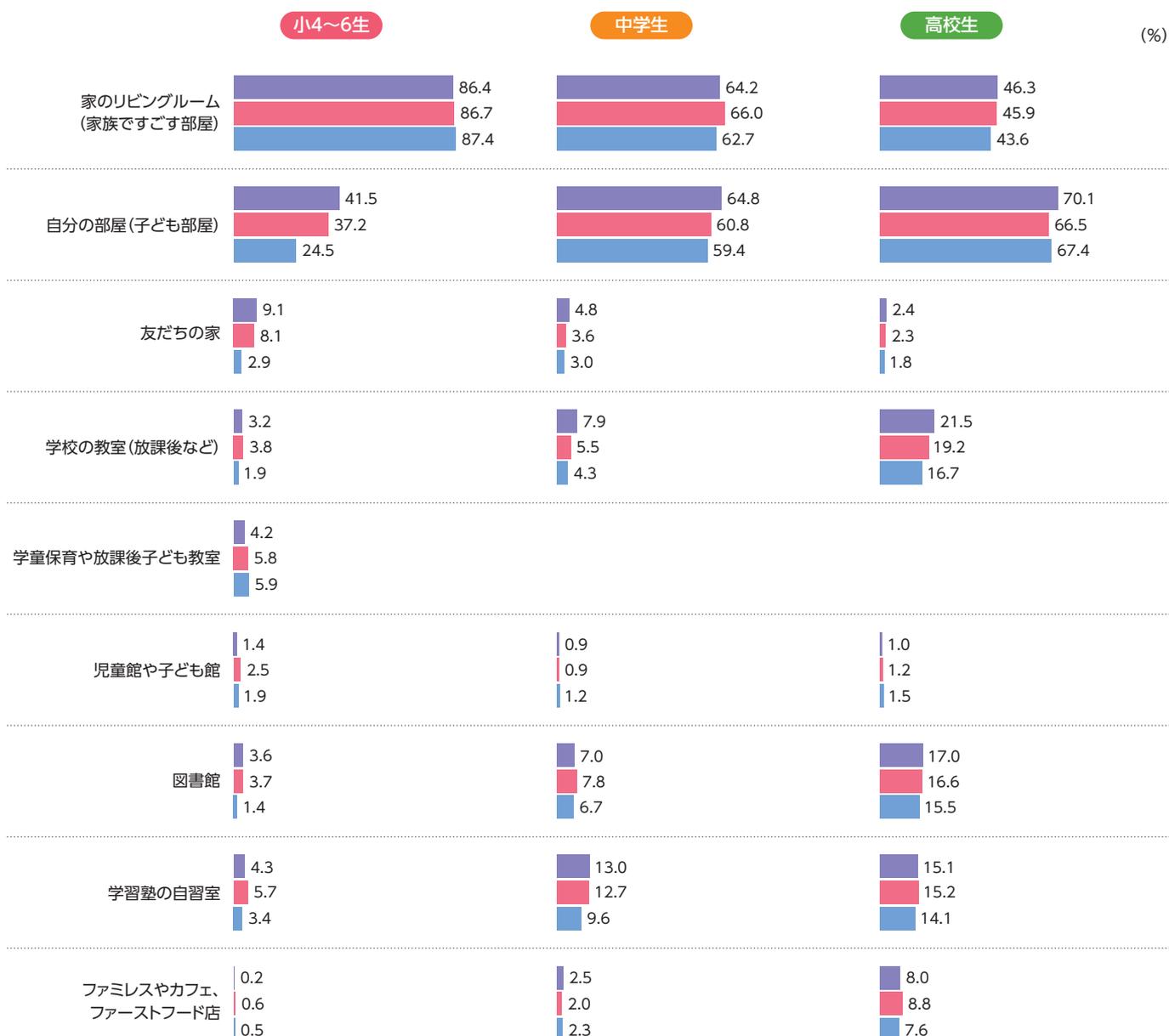
小中学生の勉強場所は「自分の部屋」が減り、「家のリビングルーム」が中心に

2016年と比べ、2025年は勉強する場所に変化がみられる。小4～6生では「自分の部屋(子ども部屋)」が4割強から2割台へと大きく減り、その一方で「家のリビングルーム(家族ですごす部屋)」で勉強する割合は9割弱と変わらず多い。中学生でも自室での勉強が減り、学校の教室(放課後など)で勉強する割合も減少しているが、リビングルームでの勉強は約6割のままである。高校生も教室で勉強する割合は減少したが、リビングルームは4割強で自室に次いで多い。

Q. あなたは、ふだん(夏休みではないふつうのとき)どこで勉強していますか。
学校や学習塾の授業以外でよく勉強する場所について、あてはまるものをすべて選んでください。

図1-5-1 勉強する場所

子ども回答



■ 2016年 ■ 2019年 ■ 2025年

注1 複数回答。

注2 「学童保育や放課後子ども教室」は中学生、高校生にはたずねていない。

I 子どもの生活と学びの変化

⑥ 学習方法

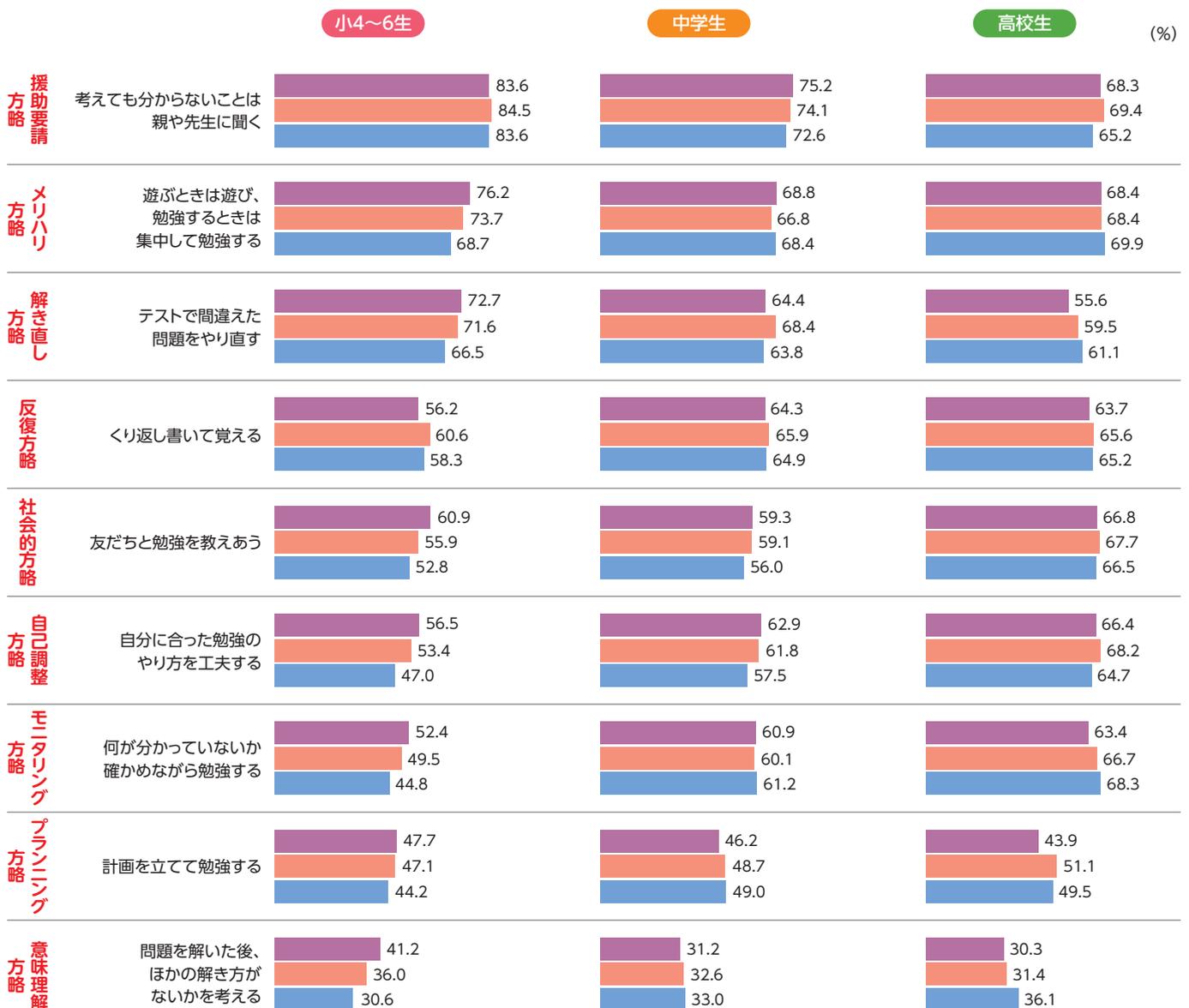
小中学生は勉強のやり方を工夫している子どもが減り、 高校生はやり直しが増える

2017年から2025年の変化をみると、小4～6生は「問題を解いた後、ほかの解き方がないかを考える」が41.2%→30.6%、「自分に合った勉強のやり方を工夫する」が56.5%→47.0%、「友だちと勉強を教えあう」が60.9%→52.8%と減少する項目が多い。また、中学生は全体的に大きな変化が少なく、横ばいの項目が多いが、「自分に合った勉強のやり方を工夫する」が2017年から2025年にかけて5ポイント以上低下している。一方、高校生は「テストで間違えた問題をやり直す」は55.6%→61.1%、「何が分かっていないか確かめながら勉強する」は63.4%→68.3%、「問題を解いた後、ほかの解き方がないかを考える」は30.3%→36.1%となり、やり直しや確認といった学習行動が増加している。

Q. あなたは、勉強するときに、次のことをどれくらいしますか。

図1-6-1 学習方法

子ども回答



注1 「よくする+ときどきする」の%。

注2 2025年の小4～6生の数値の降順に示す。

■ 2017年 ■ 2021年 ■ 2025年

I 子どもの生活と学びの変化

⑦ 学習意欲・学習動機

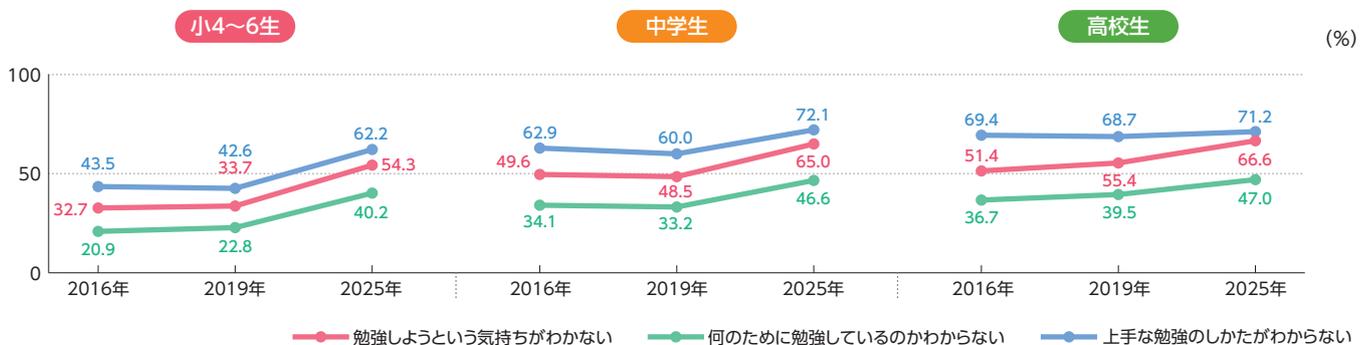
勉強のやる気が下がり、「しかられたくない」が増えている

2016年と比べると、2025年では学習意欲や学習方法の理解の低下が、すべての学校段階で顕著にみられる。「勉強しようという気持ちがわからない」と答えた割合は、小4～6生で32.7%から54.3%へと大きく増加し、中学生・高校生でも6割を超えている。「何のために勉強しているのかわからない」も、小4～6生で20.9%から40.2%と約2倍に増えた。さらに、「上手な勉強のしかたがわからない」は小4～6生で増加しており、中学生・高校生では7割前後という高い水準が続いている。学習動機に目を向けると、いずれの学校段階でも「成績がよいと周りの人がほめてくれるから」「先生や親にしかられたくないから」「周りの人に頭がよいと思われたいから」といった、他者からの評価を意識する回答が増えている。

Q. あなた自身のことについて、次のようなことはどれくらいあてはまりますか。

図1-7-1 学習意欲・学習方法の理解

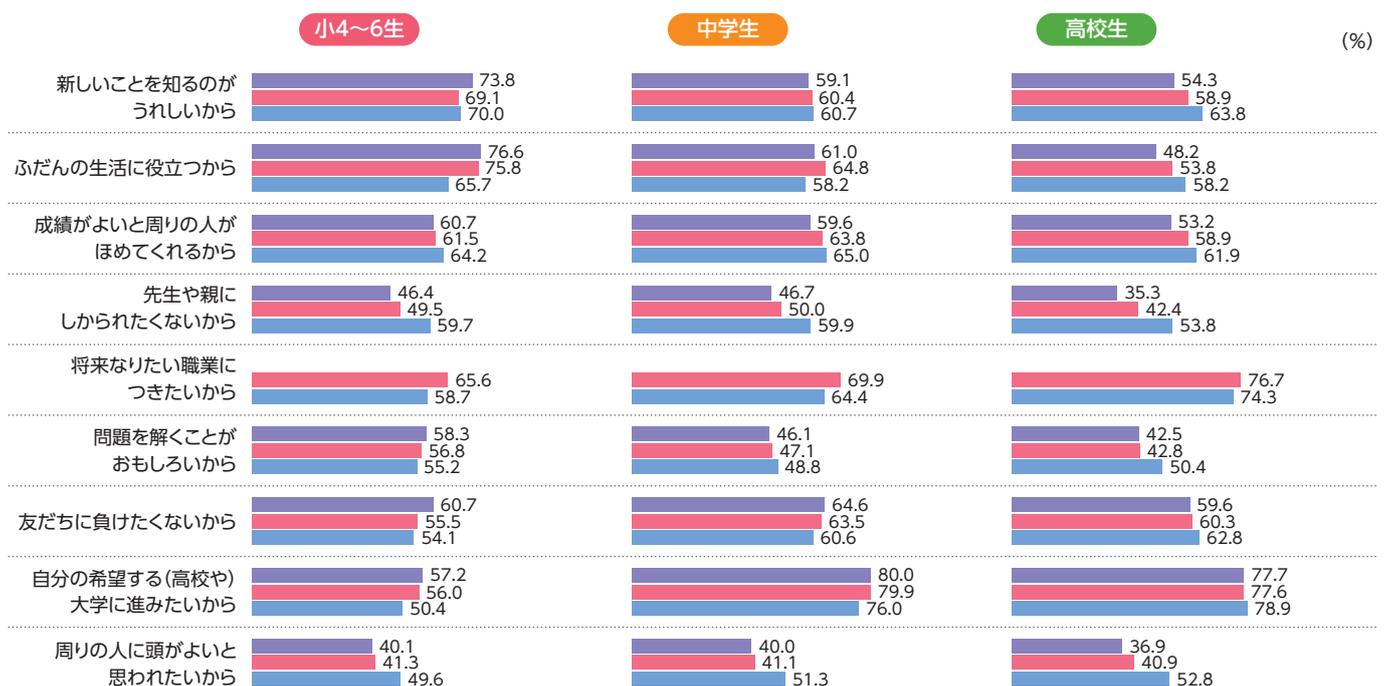
子ども回答



Q. あなたが勉強する理由について、次のことはどれくらいあてはまりますか。

図1-7-2 学習動機

子ども回答



注1 「とてもあてはまる+まああてはまる」の%。(図1-7-1、2)

注2 2025年の小4～6生の数値の降順に示す。(図1-7-2)

注3 「将来なりたい職業につきたいから」は2016年はたずねていない。(図1-7-2)

II 学校生活の変化

① 学校での生活

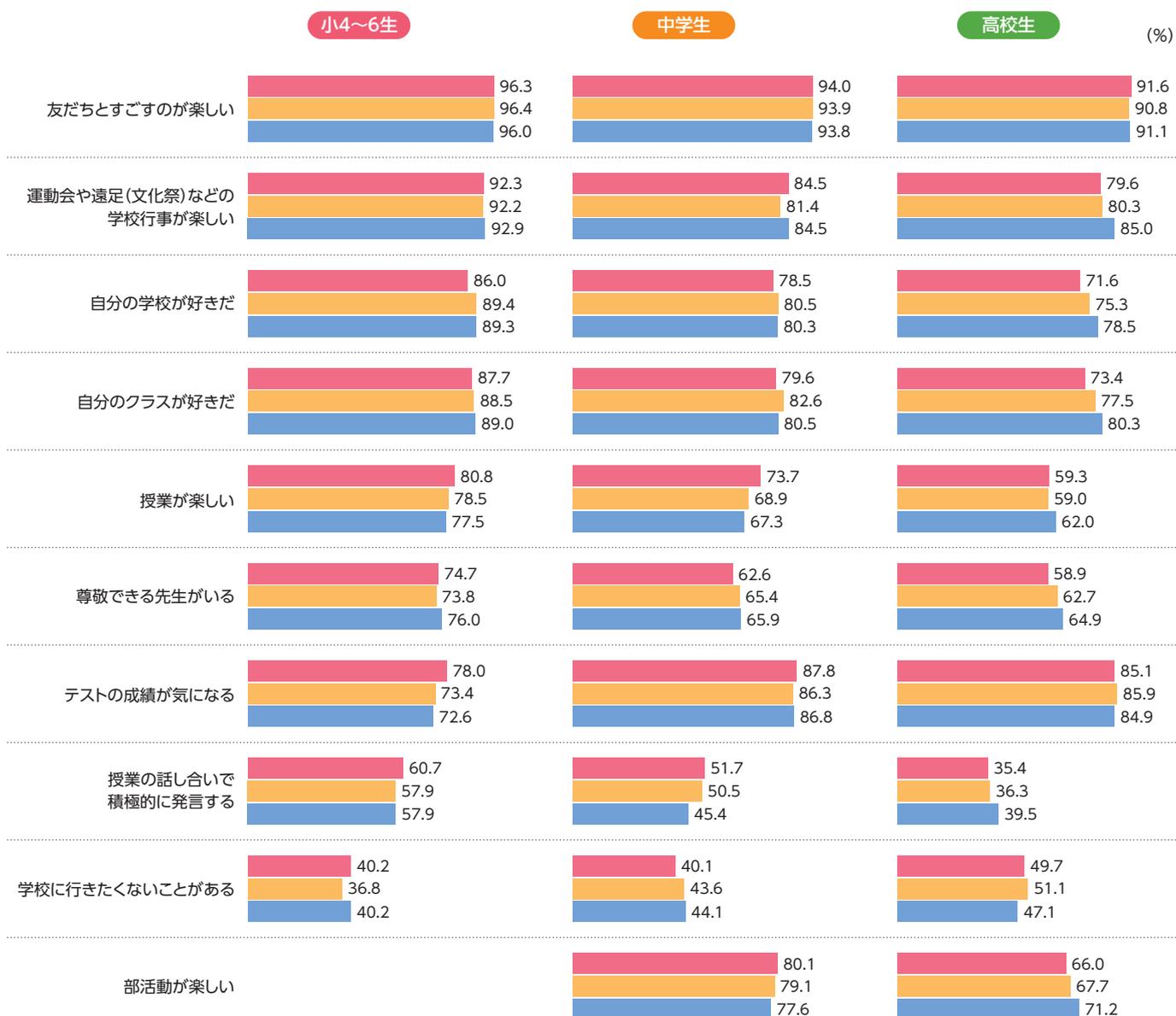
約8～9割の子どもが「友だちとすごすのが楽しい」「自分の学校が好きだ」と回答。「学校に行きたくないことがある」は4～5割。

学校生活では、「友だちとすごすのが楽しい」は2025年も引き続き高く、9割を超えている。また、「自分の学校が好きだ」「自分のクラスが好きだ」と回答した割合も約8割と多い。高校生では、自分の学校やクラスが好きや、尊敬できる先生がいるが2019年以降増えている。一方で、「学校に行きたくないことがある」は2025年に小4～6生で約4割、中学生で4割強、高校生で約5割である。「テストの成績が気になる」は小4～6生で2019年に比べて2025年は低下しているが、中学生・高校生は8割台で6年間で大きな変化はみられない。

Q. 学校生活について、次のようなことはどれくらいあてはまりますか。

図2-1-1 学校での生活

子ども回答



注1 「とてもあてはまる+まああてはまる」の%。

注2 2025年の小4～6生の数値の降順に示す。

注3 「部活動が楽しい」は小4～6生にはたずねていない。

■ 2019年 ■ 2022年 ■ 2025年

II 学校生活の変化

② 先生のかかわり

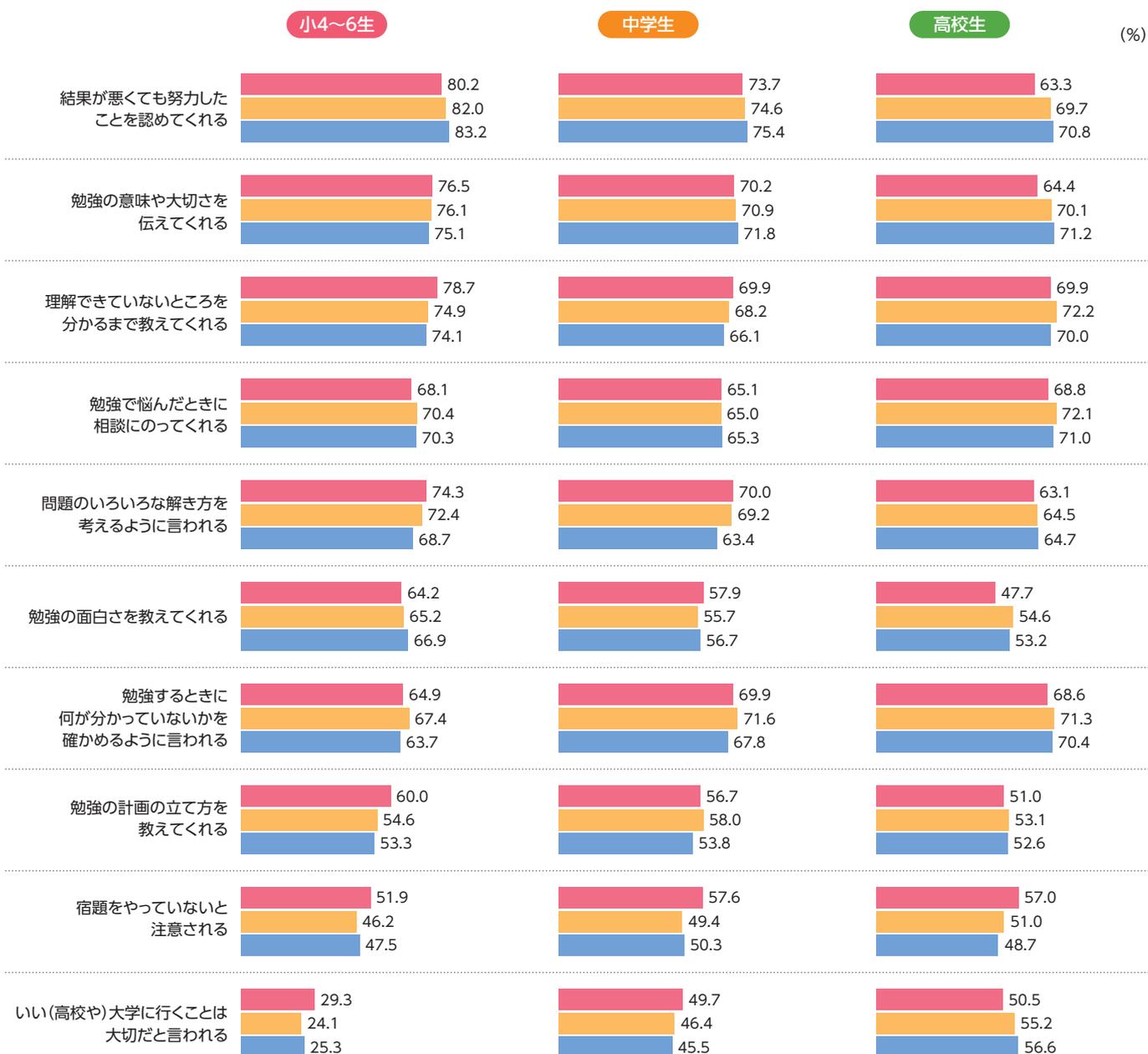
先生のかかわりは「努力を認める」が多い。宿題忘れの注意は減少

先生のかかわりについて2019年・2022年・2025年を比べると、いずれの学校段階でも「結果が悪くても努力したことを認めてくれる」「勉強の意味や大切さを伝えてくれる」「理解できていないところを分かるまで教えてくれる」などは高水準で維持されている一方、「宿題をやっていないと注意される」は低下傾向にある。学校段階別にみると「勉強の面白さを教えてくれる」は小4～6生で高く、中高生になるにつれ低くなる。「いい(高校や)大学に行くことは大切だと言われる」は小中学生よりも高校生の方が高い。

Q. 学校の先生から、言われたりしてもらったりすることとして、次のようなことはどれくらいあてはまりますか。

図2-2-1 先生のかかわり

子ども回答



注1 「とてもあてはまる+まああてはまる」の%。

注2 2025年の小4～6生の数値の降順に示す。

■ 2019年 ■ 2022年 ■ 2025年

II 学校生活の変化

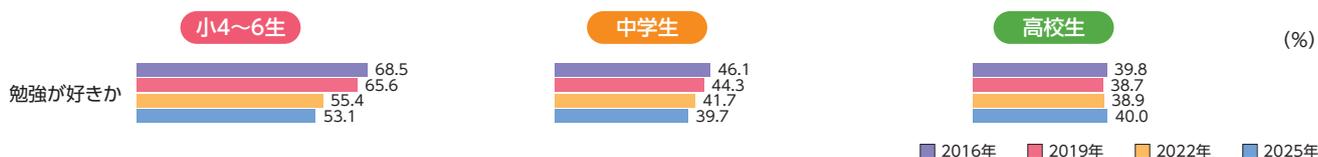
③ 勉強や教科の好き嫌い・文理意識

小学生と中学生で「勉強が好き」の割合が低下している

「勉強が好きか」をたずねたところ、小4～6生では2016年から2025年にかけて「好き」の割合が低下しており、中学生でも同様の減少がみられる。高校生はおおむね4割前後で横ばいに推移している。教科の好き嫌いでは、学校段階を問わず、「英語(外国語)」で「好き」の割合が低下している。文理意識については、小4～6生で「理系」という回答が低下している。学校段階別では、学年が上がるにつれて「文系」の割合が増える一方で、「理系」は横ばいで推移している。

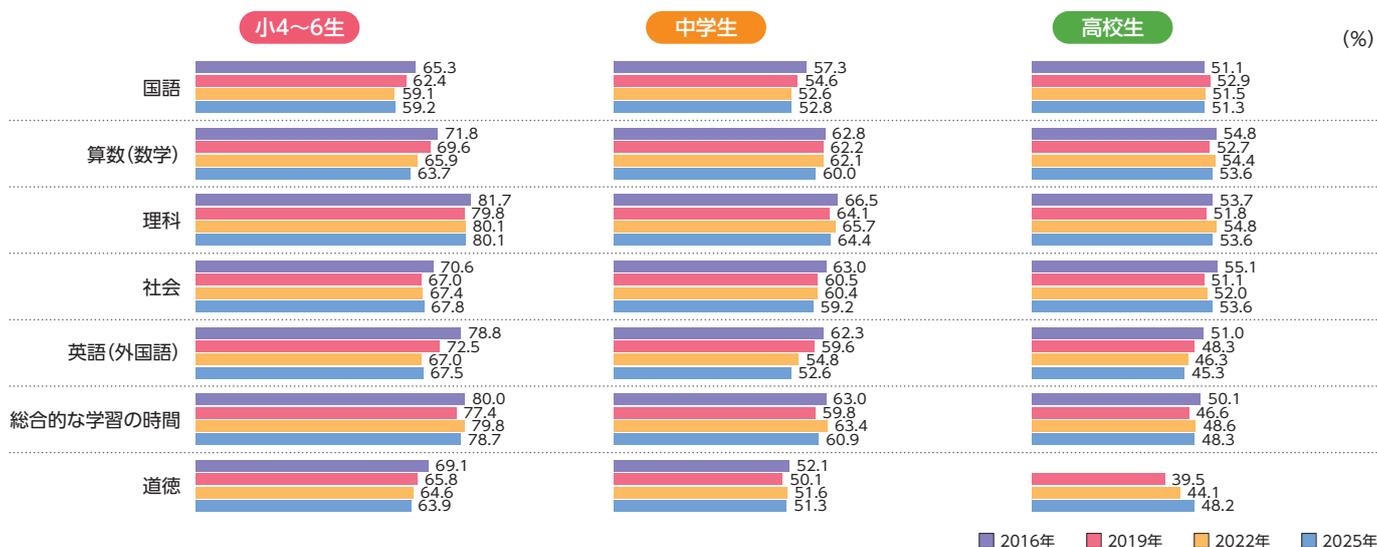
Q. あなたは「勉強」がどれくらい好きですか。

図2-3-1 勉強の好き嫌い



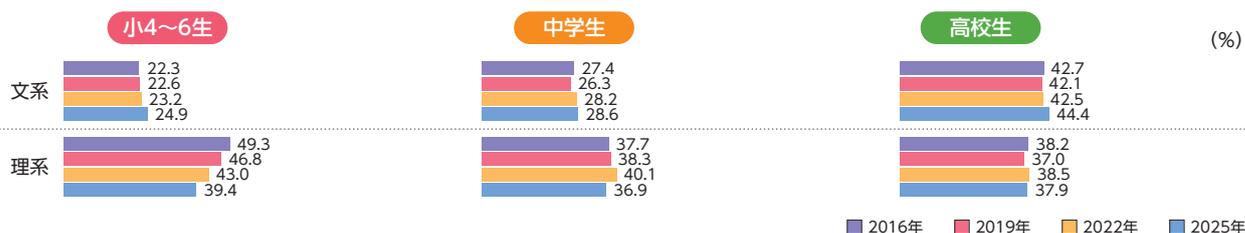
Q. あなたは、次の教科がどれくらい好きですか。

図2-3-2 教科の好き嫌い



Q. あなたは自分のことを「文系」だと思いませんか、それとも「理系」だと思いませんか。

図2-3-3 文理意識



注1 「とても好き+まあ好き」の%。(図2-3-1、2)

注2 高校生のみ「履修していない」を選択肢に設けているが、数値は「履修していない」を選択した者を除いて算出した。(図2-3-2)

注3 「道徳」の好き嫌いについて2016年は高校生にたずねていない。(図2-3-2)

注4 文系は「はっきり文系+どちらかといえば文系」、理系は「はっきり理系+どちらかといえば理系」の%。(図2-3-3)

注5 「どちらともいえない」「よくわからない」は図から省略した。(図2-3-3)

II 学校生活の変化

④ 学校の授業

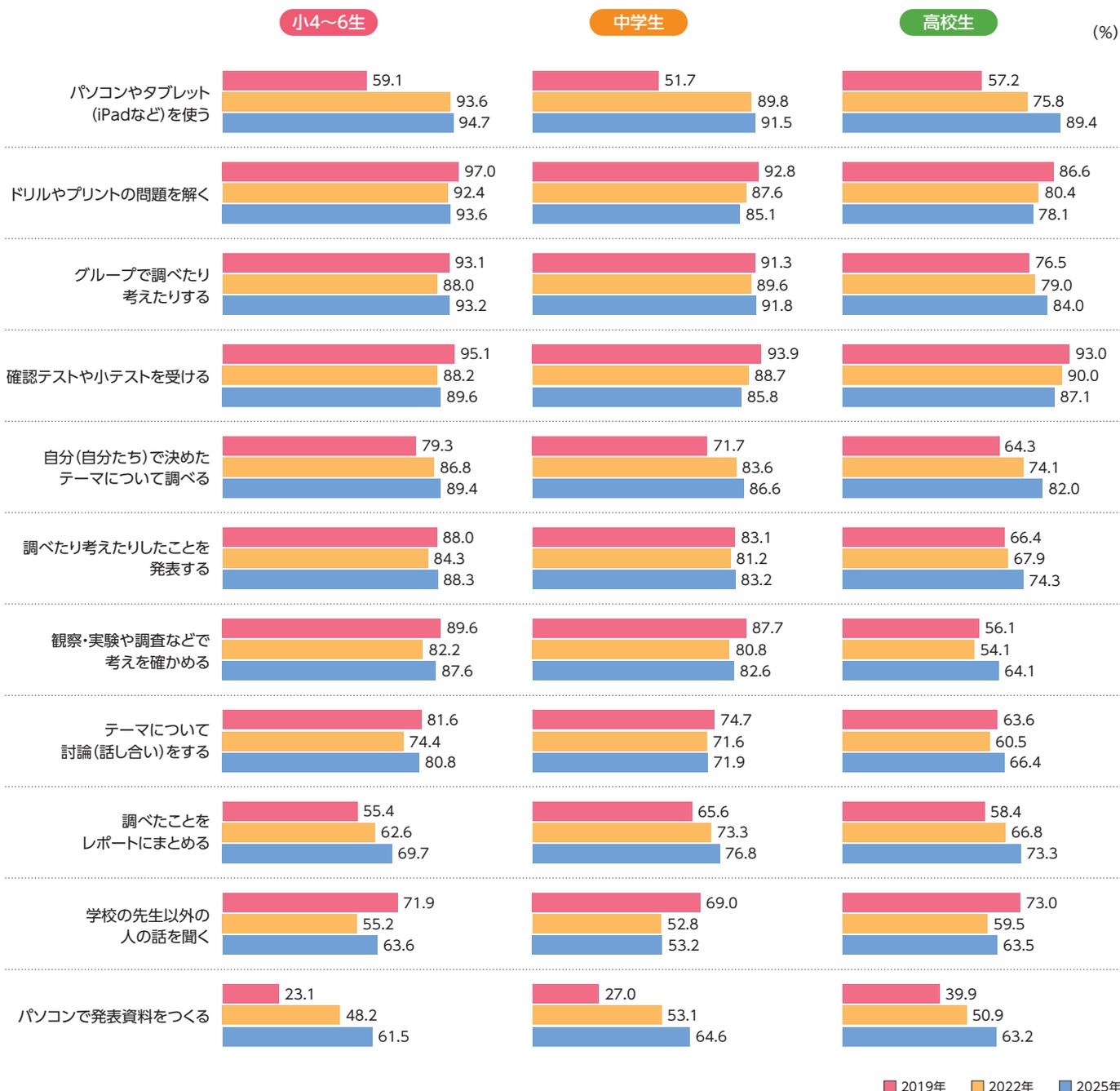
パソコン・タブレットを使って学習・発表する機会が増えている

2019年と比べて、2025年は授業でのパソコン・タブレット利用が大幅に増えた。小4～6生は6割弱から9割台へ、中学生は5割強から9割強へ、高校生も6割弱から9割弱に増加している。パソコンで発表資料をつくる割合も増え、小4～6生は2割台から6割強に、中学生は3割弱から6割台に、高校生は約4割から6割台に伸びている。調べたことをレポートにまとめる割合も増加した。一方で、ドリルやプリント、小テストなどの実施は減少傾向にある。

Q. この1年くらいの間に、学校の授業で、次のようなことはどれくらいありましたか。

図2-4-1 学校の授業

子ども回答



注1 「よくあった+ときどきあった」の%。

注2 2025年の小4～6生の数値の降順に示す。

II 学校生活の変化

⑤ 学校でのデジタル機器の利用頻度、家への持ち帰り頻度

学校でデジタル機器を「毎日使う」が増え、「持ち帰り」も増加

2021年と比べ、2025年は学校でデジタル機器を「ほぼ毎日」使う割合が大幅に上昇した。小4～6生は21.7%から41.3%、中学生は20.1%から41.4%、高校生は23.0%から46.7%となった。持ち帰り頻度も高まり、「ほぼ毎日」持ち帰るは小4～6生で11.0%から39.5%、中学生で15.8%から39.8%、高校生で26.3%から56.4%となった。学校での使用頻度と家庭での利用機会の双方が拡大していることがわかる。

Q. 学校ではデジタル機器をどれくらい使っていますか。

図2-5-1 学校で端末を使用する頻度

「ほぼ毎日」使う比率



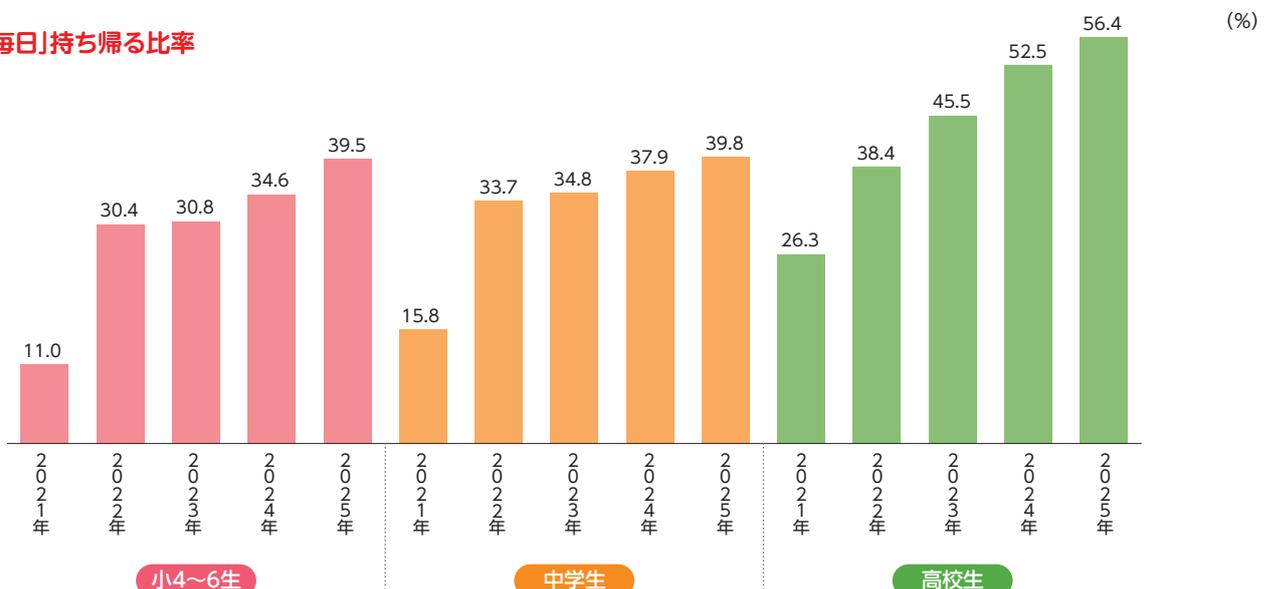
子ども回答

(%)

Q. 学校で使用するあなた専用のデジタル機器を、どれくらいの頻度で家に持ち帰っていますか。

図2-5-2 学校の端末を家に持ち帰る頻度

「ほぼ毎日」持ち帰る比率



子ども回答

(%)

注1 学校で「ほぼ毎日」使うの%。(図2-5-1)

注2 「ほぼ毎日」持ち帰るの%。(図2-5-2)

II 学校生活の変化

⑥ 学校でのデジタル機器の利用内容

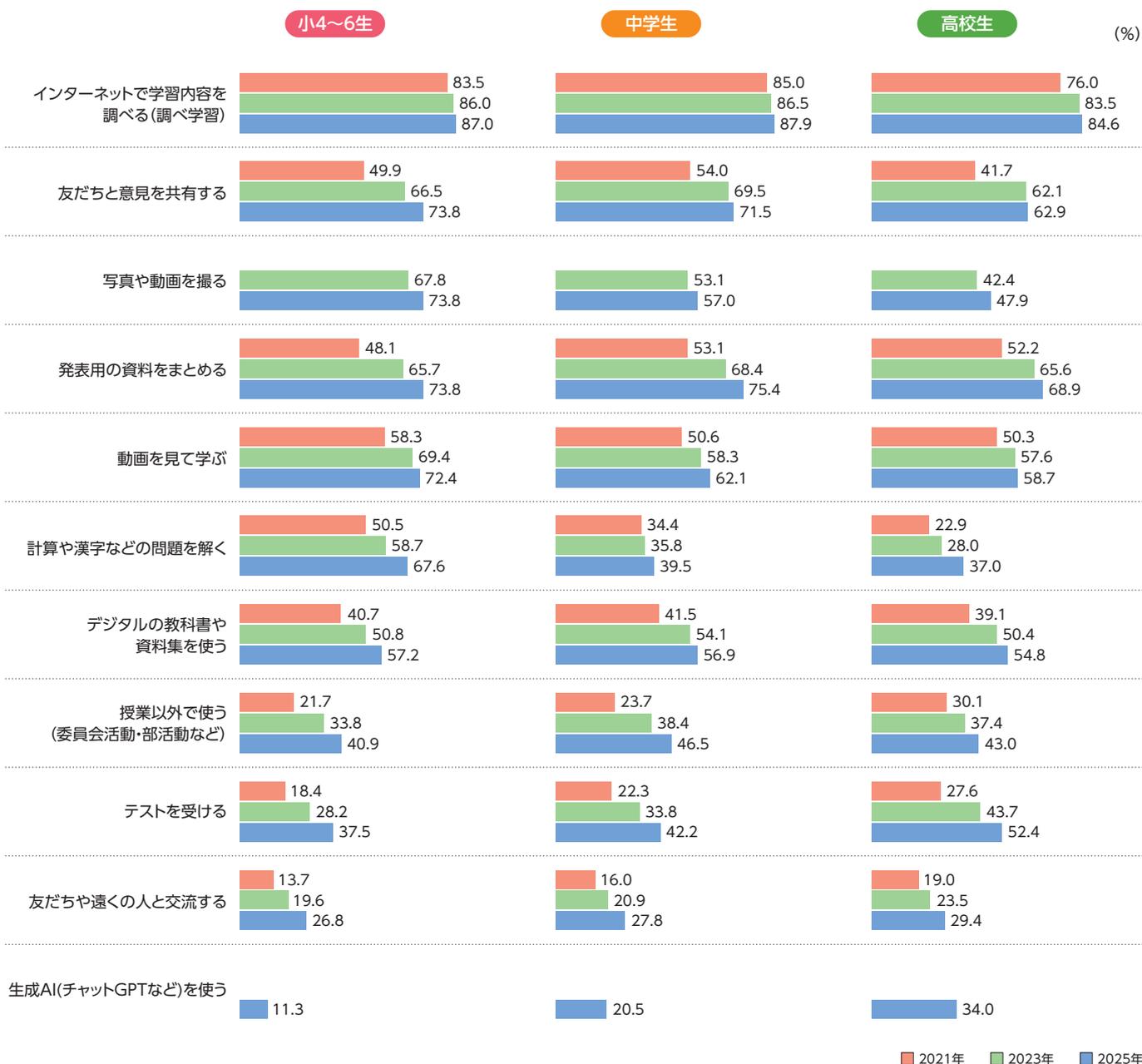
学校での端末利用は、資料作成や意見共有、テストの場面で増加

2021年に比べて2025年は、端末の利用場面が広がっている。「インターネットで学習内容を調べる(調べ学習)」はいずれの学校段階でも8割を超えていて、もっともよく利用されている。「発表用の資料をまとめる」割合は小4～6生で約5割から7割台に、中学生も5割台から7割台に増加した。「友だちと意見を共有する」割合も増えており、小4～6生と中学生は7割台、高校生も6割台である。端末で「テストを受ける」割合も増加し、高校生は2025年に5割を超えている。「生成AI(チャットGPTなど)を使う」割合は、2025年時点で小4～6生1割強、中学生約2割、高校生3割強だった。

Q. 学校ではデジタル機器を使って、次のようなことをどれくらいしていますか。

図2-6-1 学校でのデジタル機器の利用内容

子ども回答



注1 「よくする+ときどきする」の%。

注2 2025年の小4～6生の数値の降順に示す。

注3 「写真や動画を撮る」は2021年はたずねていない。「生成AI(チャットGPTなど)を使う」は2021年、2023年はたずねていない。

II 学校生活の変化

⑦ デジタル機器を使うことの効果や影響に対する意識

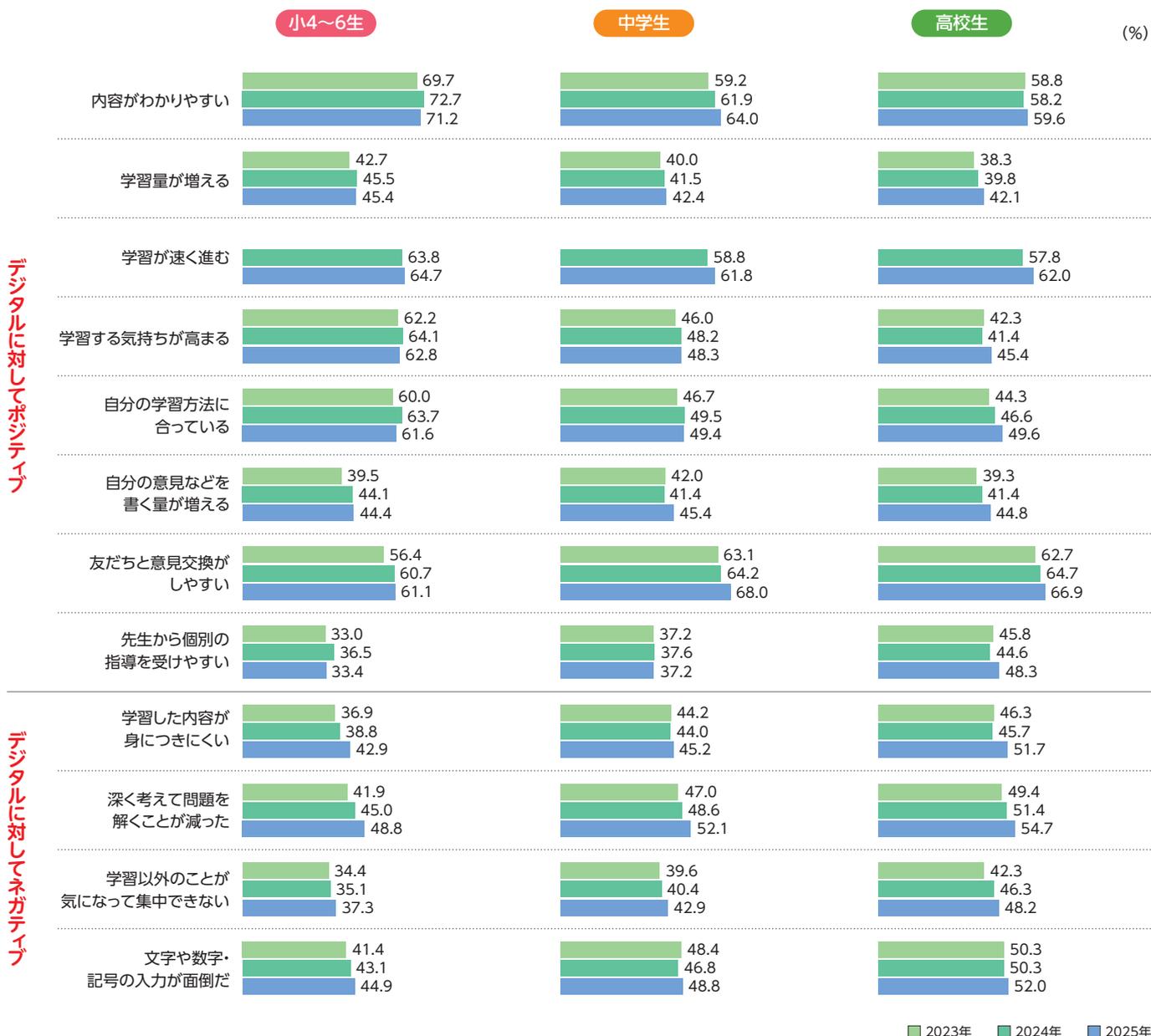
デジタル機器を使った学習は「内容がわかりやすい」「速く進む」一方、約半数が「深く考えて解くことが減った」と回答

デジタルに対するポジティブな評価として、約6～7割が「内容がわかりやすい」「学習が速く進む」「友だちと意見交換がしやすい」と回答している。高校生では、「自分の学習方法に合っている」「自分の意見などを書く量が増える」が、2023年と比べて5ポイント以上増加している。一方で、「深く考えて問題を解くことが減った」と感じている生徒は、中学生・高校生ともに5割を超えており、増加傾向にある。

Q. デジタル機器を使った学習は、紙での学習に比べて、どのように感じますか。

図2-7-1 デジタルと紙の学習に対する意識

子ども回答



注1 「とてもそう思う+まあそう思う」の%。
注2 「学習が速く進む」は2023年はたずねていない。

Ⅲ 家庭の変化

① 子どもの勉強に対する保護者のかかわり

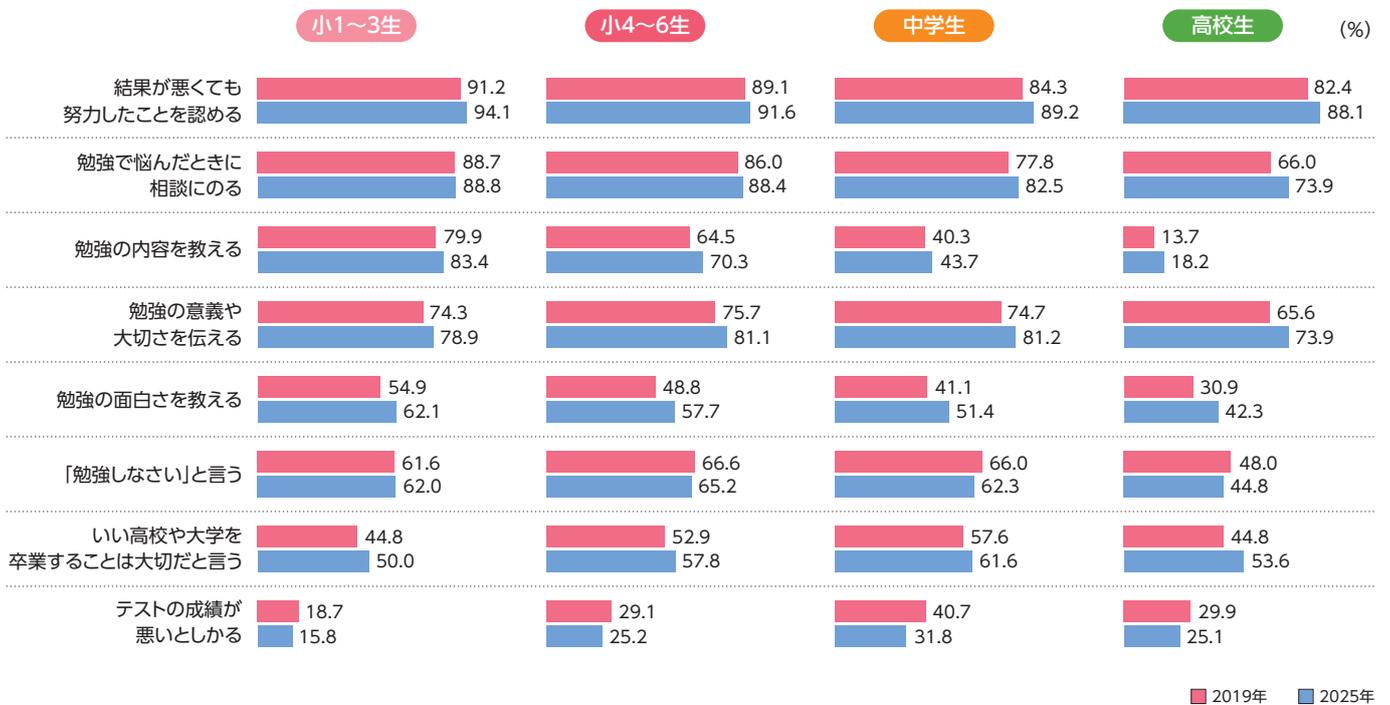
勉強へのかかわりが増える一方で、「成績が悪いとしかる」は減少

子どもの勉強に対する保護者のかかわりを2019年と2025年とで比較すると、学校段階を問わず「勉強の内容を教える」「勉強の意義や大切さを伝える」「勉強の面白さを教える」が増えていて、保護者がより子どもの勉強に関与するようになっていくことがわかる。その一方で、「テストの成績が悪いとしかる」は減少した。生成AIの利用についての意識では、「生成AIが進化すれば勉強する必要はない」は1割未満、「生成AIは積極的に子どもの学習に取り入れたほうがいい」は4割程度を推移しており学年による差も小さい。

Q. 調査の対象となっているお子様の勉強に対するあなたのかかわりについて、次のことはどれくらいあてはまりますか。

図3-1-1 子どもの勉強に対する保護者のかかわり

保護者回答

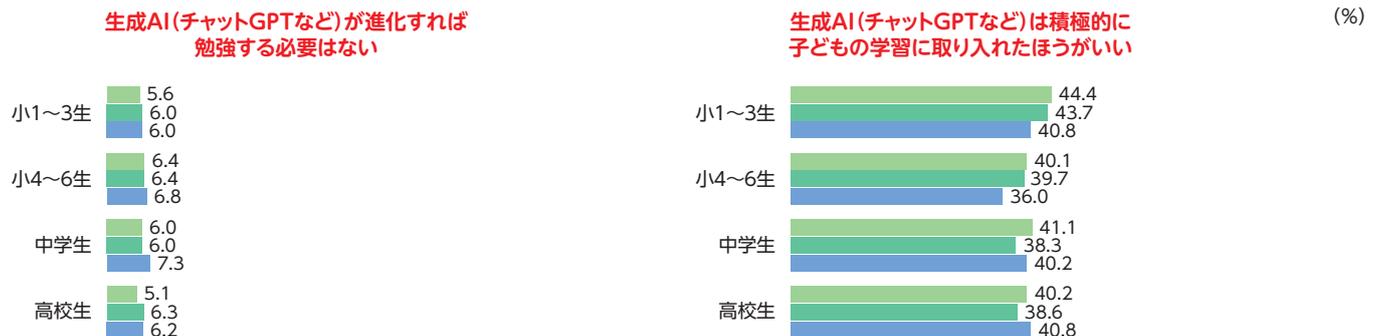


■ 2019年 ■ 2025年

Q. あなたは、次のことについてどう思いますか。

図3-1-2 生成AIに対する保護者の考え

保護者回答



■ 2023年 ■ 2024年 ■ 2025年

注1 「とてもあてはまる+まああてはまる」の%。(図3-1-1)
 注2 小1~3生の保護者の2025年の数値の降順に示す。(図3-1-1)
 注3 「とてもそう思う+まあそう思う」の%。(図3-1-2)

Ⅲ 家庭の変化

② 1年間の経験

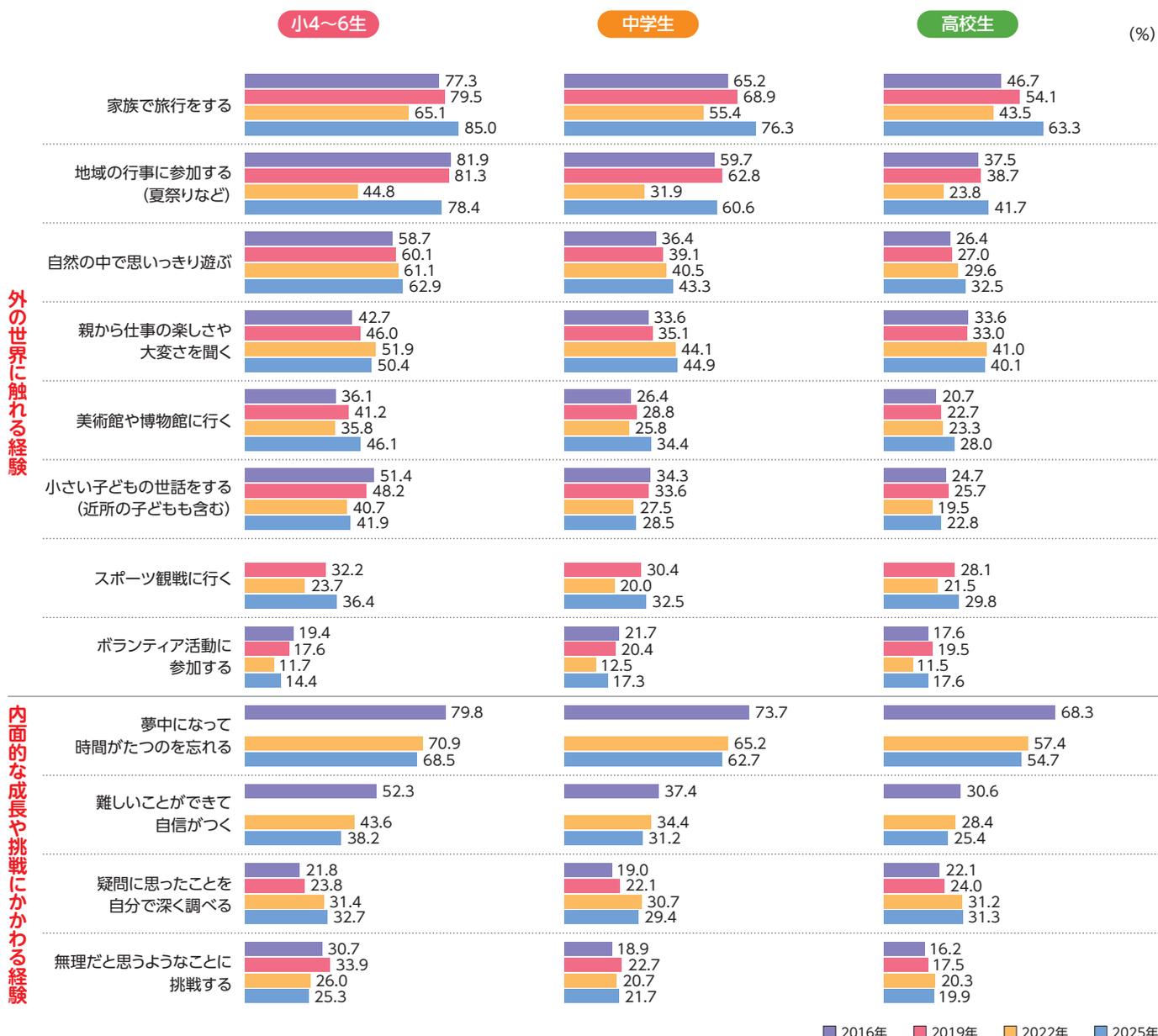
コロナ禍の影響で2022年に減少した家族旅行や地域行事が増加

2016年と比べると、2025年には、家族や地域とかかわる体験が増えている様子がみられる。「家族で旅行をする」割合は、すべての学校段階で増えており、とくに高校生では4割台から6割台へと大きく増加した。「地域の行事に参加する」については、2022年に一度大きく減少したものの、2025年には回復し、小4～6生で8割近く、中学生で6割、高校生でも4割強となっている。コロナ禍で減少した地域活動が再び戻りつつあることがうかがえる。一方で、「夢中になって時間がたつのを忘れる」といった没頭体験は減少しており、いずれの学校段階でも2025年は2016年より10ポイント以上低下している。

Q. この1年くらいの間に、あなたは次のようなことを経験しましたか。経験したことがあるものをすべてお選びください。

図3-2-1 子どもの1年間の経験

子ども回答



注1 複数回答。

注2 経験の種類別に2025年の小4～6生の数値の降順に示す。

注3 1年間の経験に関する17項目のうち、いずれか1つ以上の学校段階で5ポイント以上増減している項目のみを図示した。

注4 「スポーツ観戦に行く」は2016年はたずねていない。「夢中になって時間がたつのを忘れる」「難しいことができて自信がつく」は2019年はたずねていない。

Ⅲ 家庭の変化

③ 教育費

教育費は増加傾向で、SES（社会経済的地位）による差が拡大

2015年と比べると、2025年には子ども1人あたりの月平均教育費は全体的に増加している。学校段階別にみると、小1～3生では11,000円から13,523円に、小4～6生では14,849円から16,961円に、中学生でも17,028円から18,318円に、高校生についても13,112円から14,250円になった。一方、教育費の動向を世帯のSES（社会経済的地位）別に見ると、層による差も明確になっている。もっとも高いH層では、いずれの学校段階においても教育費が高く、小中学生では2015年から2025年にかけて増加幅も大きい。これに対し、もっとも低いL層では教育費の水準が低く、増加の度合いも比較的緩やかである。その結果、2015年と比べて2025年には、H層とL層の教育費の差がさらに広がった。

Q. 調査の対象となっているお子様1人の教育費の金額を、月平均で教えてください。（習い事や学習塾の費用、教材費などの合計。学校の授業料は除きます）

図3-3-1 1か月あたりのお子様1人の平均教育費

保護者回答

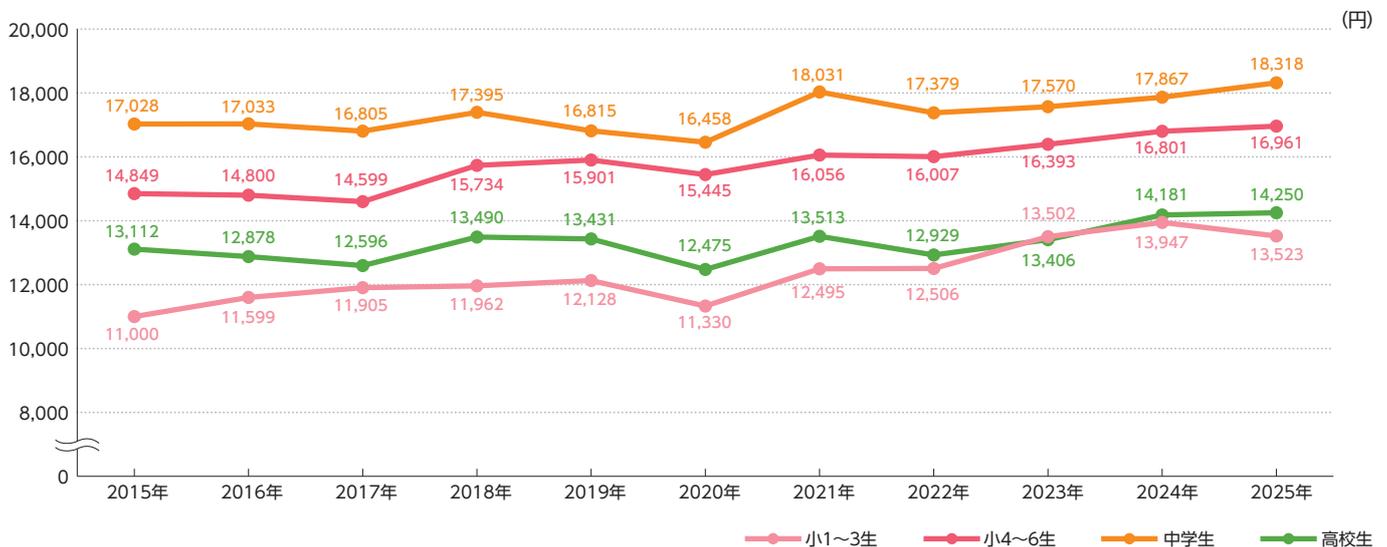
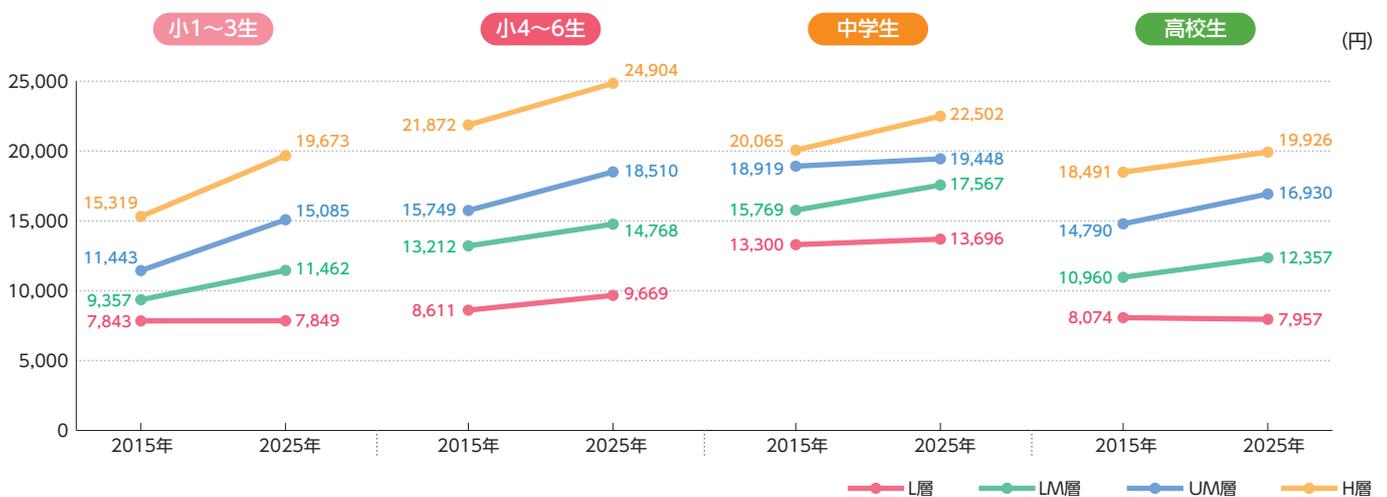


図3-3-2 SES別にみた1か月あたりのお子様1人の平均教育費

保護者回答



注1 平均教育費は「1,000円未満」を500円、「5,000円～10,000円未満」を7,500円、「50,000円以上」を52,500円のように置き換えて、「無回答・不明」を除外した上で算出。(図3-3-1、2)

注2 世帯収入、父親学歴、母親学歴、父親職業の4変数から社会経済的地位(SES)尺度を作成した。世帯収入は区分の中間値に換算し、父母の学歴は教育年数に変換、父親職業はSSM調査の職業威信スコアを用いた。これら4変数を各Wave・学年ごとに標準化(zスコア)し、その平均をSES得点とした。欠損がある場合は利用可能な変数で算出し、全変数欠損者は除外した。最終的に、SES得点を学年・Waveごとに四分位に分け、4つのSES層Lowest SES(L層)、Lower middle SES(LM層)、Upper middle SES(UM層)、Highest SES(H層)とした。(図3-3-2)

Ⅲ 家庭の変化

④ 今後の社会に関する意識

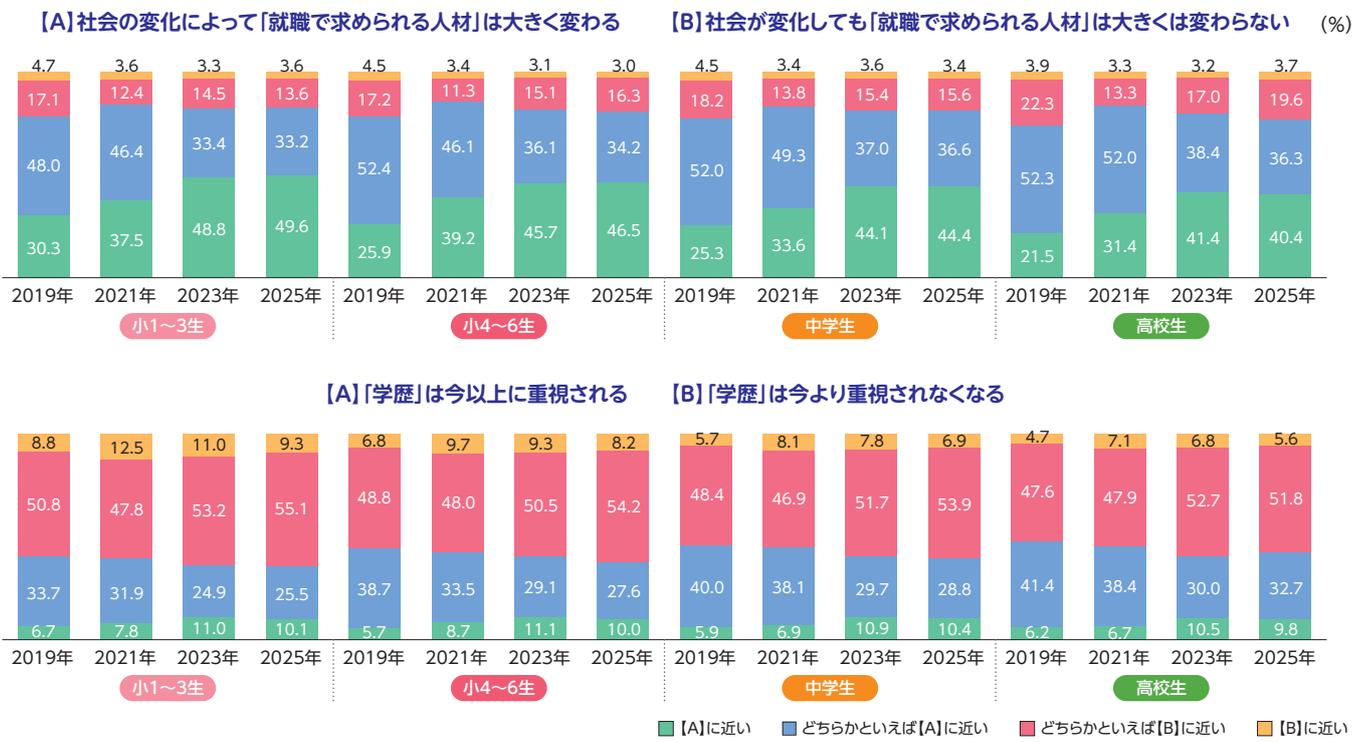
保護者は「就職で求められる人材は変わる」、 子どもは「これからの日本が不安だ」が増加

2019年と比べて2025年は、「[A]社会の変化によって就職で求められる人材は大きく変わる」に近いと回答した保護者の割合が増加している。小学生の保護者では、約3割から約5割へと伸びている。中学生・高校生の保護者でも同様に増加がみられる。また、日本の将来に対する不安は保護者の間で非常に高く、2025年には全学年の保護者の約9割が「これからの日本がどうなるか不安だ」と感じている。子どもについても、「これからの日本がどうなるか不安だ」と感じる割合は2019年から増加しており、2025年には小4～6生で55.4%、中学生で64.5%、高校生で71.3%になった。

Q. 今後の社会について、あなたの考えをお聞きます。
AとBの2つの意見のうち、あなたの考えに近いのはどちらですか。

図3-4-1 今後の社会に関する意識

保護者回答

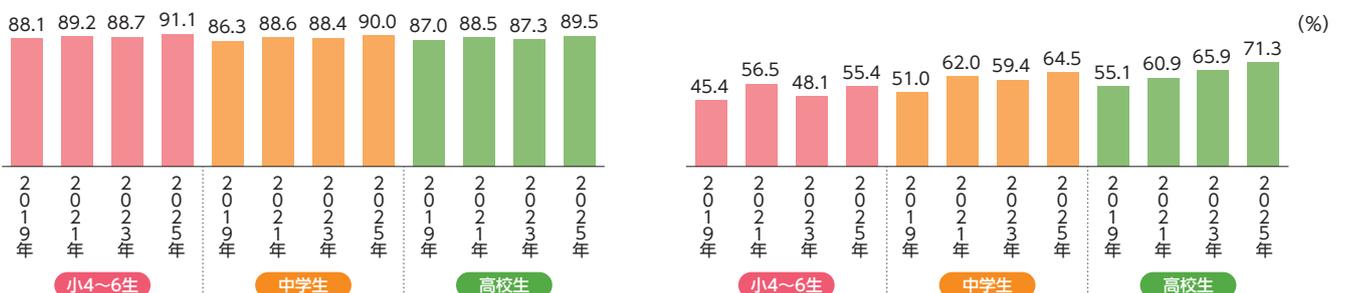


Q. 今後の社会について、あなたの考えをお聞きます。

図3-4-2 今後の社会：これからの「日本」がどうなるか不安だ

保護者回答

子ども回答



注 「とてもあてはまる+まああてはまる」の%。(図3-4-2)

Ⅲ 家庭の変化

⑤ 親子の進学意識

小中学生では、親子とも大学以上の進学希望が増加している

2019年以降、小中学生で「大学以上」を希望する割合が高まっている。2025年には、小4～6生で55.0%、中学生で64.1%、高校生で75.1%となった。一方、「まだ決めていない」とする割合はわずかに減少しており、2025年には小4～6生で25.2%、中学生で17.5%、高校生では7.5%である。次に保護者の回答をみると、「大学以上」を希望する割合は子どもよりも高く、2025年にはいずれの学校段階でも約7割に達している。また、「まだ決めていない」とする割合は小中学生では低下傾向にある。

Q. あなたは、将来、どの学校まで進みたいと思いますか。

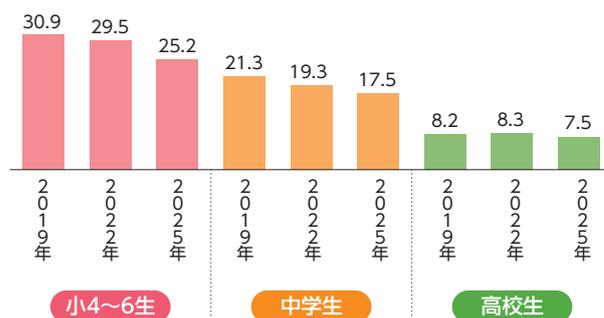
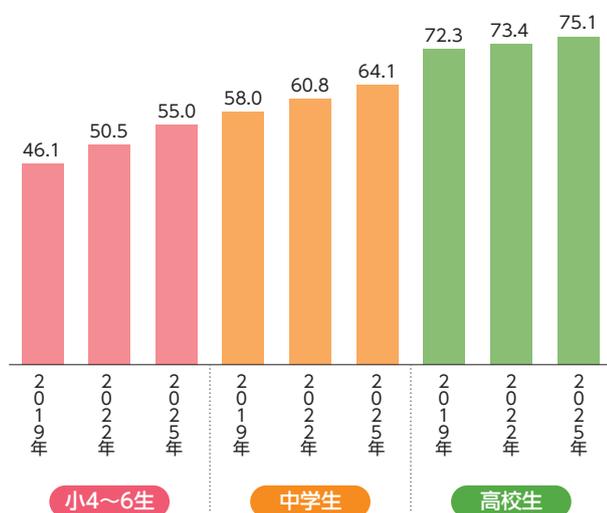
図3-5-1 子どもが将来進みたい進学段階

子ども回答

(%)

①「大学以上」を希望する割合

②「まだ決めていない」の割合



Q. あなたは、調査の対象となっているお子様を、将来、どの学校段階まで進学させたいとお考えですか。

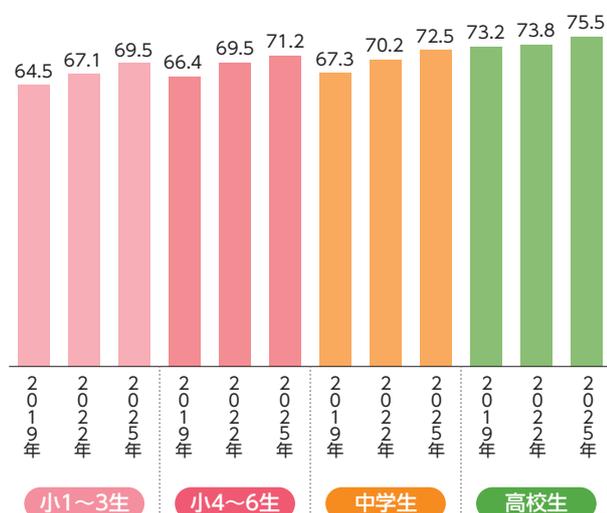
図3-5-2 保護者が希望する子どもの将来の進学段階

保護者回答

(%)

①「大学以上」を希望する割合

②「まだ決めていない」の割合



注 「大学(四年制、六年制)まで+大学院まで」の%。(図3-5-1, 2)

東京大学社会科学研究所・ベネッセ教育総合研究所 共同研究 「子どもの生活と学び」研究プロジェクト

調査企画・分析メンバー

プロジェクト代表者

藤原 翔 (東京大学社会科学研究所 教授)

野澤 雄樹 (ベネッセ教育総合研究所 所長)

プロジェクトメンバー

●東京大学社会科学研究所

大野 志郎 (東京大学社会科学研究所 特任准教授)

余田 翔平 (東京大学社会科学研究所 准教授)

●ボード会メンバー ※50音順

秋田 喜代美(学習院大学 教授、東京大学 名誉教授)

松下 佳代 (京都大学 教授)

耳塚 寛明 (お茶の水女子大学 名誉教授)

●ワーキンググループメンバー ※50音順

猪原 敬介 (北里大学 講師)

小野田 亮介(山梨大学 准教授)

数実 浩佑 (龍谷大学 准教授)

豊永 耕平 (近畿大学 講師)

●アドバイザーボードメンバー ※50音順

石田 浩 (東京大学 名誉教授・客員教授)

大崎 裕子 (日本社会事業大学 准教授)

香川 めい (大東文化大学 准教授)

佐藤 香 (東京大学 名誉教授)

●ベネッセ教育総合研究所 ※50音順

岡部 悟志 (ベネッセ教育総合研究所 主任研究員)

小川 淳子 (ベネッセ教育総合研究所 研究員)

木村 治生 (ベネッセ教育総合研究所 主席研究員)

佐藤 昭宏 (ベネッセ教育総合研究所 主席研究員)

野崎 友花 (ベネッセ教育総合研究所 主任研究員)

松本 聡子 (ベネッセ教育総合研究所 研究員)

(調査スタッフ)

中島 功滋 (ベネッセ教育総合研究所 主任研究員)

森 俊彰 (ベネッセ教育総合研究所 主任研究員)

大内 初枝 (ベネッセ教育総合研究所 スタッフ)

渡邊 未央 (ベネッセ教育総合研究所 スタッフ)

※所属・肩書きは、2026年3月時点のものです。

研究プロジェクト WEBサイトのご案内

東京大学社会科学研究所
<https://web.iss.u-tokyo.ac.jp/clal/>



ベネッセ教育総合研究所
<https://benesse.jp/berd/special/childedu/>



「子どもの生活と学びに関する親子調査2025」ダイジェスト版

発行日：2026年3月31日

発行人：野澤 雄樹

編集人：佐藤 昭宏

発行所：(株)ベネッセコーポレーション ベネッセ教育総合研究所

デザイン・編集協力：(株)フライ・ネクスト

0HNBC3

©Benesse Educational Research and Development Institute

無断転載を禁じます。